

現代國語讀本

八波則吉編



東京開成館藏版

教科書
41
200

41640

教科書文庫

4

810

41-1924

26600
86796

76

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

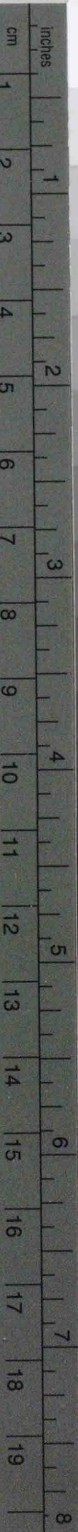


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



資料室

教科書文庫
4
810
41-1924
2000080796

42
810
713

文部省檢定
大正三十一年八月十八日
中學國語教科用

現代國語讀本

八波則吉編



東京開成館藏版



天龍峽

現代國語讀本

現代國語讀本 卷二

目次

| | | |
|---------------|-------|----|
| 一 四 恩 | 清浦奎吾 | 一 |
| 二 天杯下賜(口語書簡文) | | 九 |
| 三 父母のなさけ | 柳澤淇園 | 一五 |
| 四 里 心懸 | 北原白秋 | 一七 |
| 五 私の少年時代(自修文) | 沼波瓊音 | 一八 |
| 六 天龍川下り | 和辻哲郎 | 二五 |
| 七 關が原紀行 | 上野山清貢 | 三三 |

八 草鞋よ(詩).....若山牧水 三六

九 渡り鳥.....薄田泣菫 三九

一〇 友の消息(口語書簡文).....四五

一 ロンドンへ.....四五

二 ロンドンから.....四七

三 ロンドン消息.....四九

一一 世界三都の印象.....鶴見祐輔 五五

一二 義士の討入.....村上浪六 六四

一三 冬休日記(自修文).....(日記文範) 七〇

一四 試作.....八一

一 寒雨.....八一

二 橋の霜(詩).....八三

三 ペンの音.....八四

一五 歌話.....中村秋香 八六

一 とりぬ坂.....八六

二 あがたの宿.....八八

三 焼野の原.....八九

一六 たのしみは(和歌).....橘曙覧 九一

一七 自修.....嘉納治五郎 九三

一八 發明家エヂソン(自修文).....(近世偉人物語) 一〇一

一九 功名心.....竹越與三郎 一〇九

二〇 最後の授業.....菊池幽芳 一一五

二一 海邊の小社.....加能作次郎 一二三

| | | | |
|----|--------------------|---------------|-----|
| 二二 | 藤樹先生…………… | 橘南谿…………… | 二三 |
| 二三 | 雪のわかれ(自修文)…………… | (教育講談)…………… | 二六 |
| 二四 | 蝶々(詩)…………… | 西條八十…………… | 二七 |
| 二五 | 熱帯の海…………… | 島崎藤村…………… | 二八 |
| 二六 | 薯拾ひ…………… | 水野廣徳…………… | 二九 |
| 二七 | 山の湯…………… | 久米正雄…………… | 三〇 |
| 二八 | 平民宰相立志物語(自修文)…………… | (東京日々新聞)…………… | 三一 |
| 二九 | 北國の初春…………… | 相馬御風…………… | 三二 |
| 三〇 | 春待つ心(詩)…………… | (國定讀本)…………… | |
| 三一 | お遍路さん…………… | 荻原井泉水…………… | |
| 三二 | 寓話三題…………… | | 一三三 |

現代國語讀本 卷二

一四 恩

清浦奎吾

清浦奎吾
熊本縣の人、
嘉永三年生、
子爵、樞密院
議長
淨海入道
平清盛

私は自分の官途上に於て四恩といふことを感じて居る。四恩については、平重盛が其の父淨海入道を諫める時にも、「世に四恩あり」と説いたのであるが、私の感じて居る四恩はこれと違つて居る。君主の恩は申すまでもないことではあるが、私は官途上に於て、親の恩について最も深く感じて居る。私の生家は格別貧家といふ程ではなかつたが、無論

また富家といふことは出来なかつた。而も私は兄弟六人中の五番目であつたから、學資も不十分であつたし、且親の遺産として相續した物は何もなかつた。併し、唯一つ如何



清浦奎吾

なる財産にも優る所の極めて健康な身體を授かつた爲に、官途四十九年間の今日まで、終に殆ど病氣といふ病氣をしたことがなく、人一倍の勉強も出来、また今日七十三歳の老齡に達しても、なほ矍鑠として健康を保つて居る。此の健康は活動の資本とも謂ふべきであるから、第一に親の恩を最も深く感じて居る次第である。

今日
この文は大正
十一年の作て
ある

水本成美
明治十七年歿
年五十四

第二には、私は今日でこそ好々爺と見られて居るが、これでも少壯時代には頗る霸氣の強い強情張りで、隨分人と激しく議論もし衝突もしたことがある。所が、或日、時の元老院議員水本成美翁に招かれた。翁は江戸の人、昌平黌出身の學者で、薩摩公に抱へられ、後朝廷に召されて元老院議員にもなつた程の有徳な君子であつたから、私は師父の如く尊敬を拂つて、常に其の教を受けて居つた。さて、私は翁の招によつて其の宅を訪問すると、打寛いだ話で、お前は何事も誠に良く出来るが、あの短氣な、むかつ腹を立てることは宜しくない。短氣は損氣といふことがある。將來立身出世すべき有望な人が、短氣の爲に身を過るのは惜しいこと

である。之を見なさい。」と言つて、一部の寫本を渡された。
其の寫本は「柳營御夜話」といふ本で、徳川八代將軍吉宗公
が夜、近侍の若侍などに話して聞かされた事柄を、澁谷隱岐
守といふ近侍頭の人が筆記したもので、其の中に、翁が「此處
を見よ。」といつて印を附けられた二廉がある。其の文は次
のやうである。

一、短氣なる者は事を爲損じ身を失ふこと多し。我が性
質短氣なりと知らば、隨分勘忍の心を用ひ、禁め慎むべし。
短氣は大方我儘より出づるものなり。名人の上には嘗
て之なきことなり。
一、昔、數度武功の譽ある老士あり。若き人々、武功物語を

巧言令色
巧言令色鮮矣
仁(論語)

追感四恩
奎堂

追感四恩

清浦奎言筆蹟

所望しけるに、老士語つて曰く、某若き時
にさしたる武功はなし。天性愛敬あり
て人に善く思はれし故に、少しの働をも
よく執成されて、思はず譽を得たり。人
は愛敬あるがよし。」と語りしとかや。殊
勝の物語なり。

そして、翁は、士たる者は腕を扼し肩を聳か
して強がるばかりが偉いのではない。巧
言令色は孔子も之を戒められたが、吉宗公
の戒にもある通り、人には愛敬が最も大事であるから、能く
氣を付けなさい。」と言聞かされた。

山縣公
名は有朋、山
口縣の人、陸
軍大將、元帥、
公爵、大正十
一年歿、年八
十五

翁の此の詞には私も非常に感動した。殊に時と場合が最も自分の頭腦に印象し易い機會であつたから、深く之を服膺して、爾來その修養に努めた。其の結果として、自分の性質は大いに變化して、頗る寛容・温厚に傾いて來て、以前短氣・過激を戒められた私が、後年には、山縣公から、君は餘り圓滿でいかぬ。もつとびしく、やり給へ。」と言はれた位であつたから、往年の水本翁の戒が、私に取つて非常な名藥であつたことが分る。若し翁の戒がなかつたなら、私は必ず身を過つたであらうと思ふ。想うて此に到れば、實に翁の恩の深いことを感ぜずには居られない。即ち第二には先輩の恩を擧げる次第である。

白根專一
山口縣の人、
男爵、明治三
十一年歿、年
五十

第三には朋友の恩。私は益友として尊敬する友達を可なり多く持つて居るが、其の中でも、内務省で同勤して居つた白根專一君は、勿頸の益友で、餘程恩を受けたことがある。私が芝西久保城山町に新に邸宅を構へ、其の落成祝に四五人の親友を招待した時、白根君は、清浦君、斯ういふ立派な家に住んで宜いかい。」と質し、それから御馳走が運ばれた所が、「斯ういふ贅澤なことでは清浦家は滅亡だのう。」と、冗談のやうに、併し頗る力の籠つた詞を發せられた。何でもない詞のやうだけれども、私は深く感得する所があつて、其の結果、今日までに大なる利益を得た。即ち第三には朋友の恩を擧げる次第である。

第四は時世の恩。時世の恩といへば妙に聞えるが、時世が暗に人を指導し、人の知識を啓發し、人をして之に順應して働かなければならぬやうに促す効力は、實に甚大なものである。私が今日まで色々働いたことの出來たのは、全く時世の賜で、時世は私に取つてまた大恩人であるといふは、なればならぬ。是で都合四恩になる。

恩に對しては報ずることがなくてはならぬ。親から健康な身體を授かつたのは寔に有難いことであるから、其の恩を報ずるには、其の授けられた身體をなるべく善く養生して、不健康に陥らぬばかりでなく、益之を健全にして、活動に耐へ得るやうにしなければならぬ。「身體髮膚、享之、父母

身體髮膚
孝經にある語

敢不毀傷、孝始也。」と聖人も説かれて居る。また、先輩及び朋友の誠意的教訓・忠告等に對しては、自分も亦誠意を以て能く之を服膺し、其の教訓・忠告を無にせぬやうに務めるのが、即ち先輩・朋友に對する報恩の道である。そして、時世の恩に報ずるには、時世に啓發された知識を以て、よく時世に順應するやうに努めて、時世の必要に應じて力を盡さなければならぬ。私は及ばずながらも、以上の四恩に對して、なるべく之を報ずるやうに心掛けて居る。

二 天杯下賜

天杯下賜！ 母上様、お目出たう存じます。遙にお祝

縣廳

こゝは石川縣廳を指す、編者は當時第四高等學校教授として金澤市に居住中であつた

一昨年
大正二年

ひ申し上げます。
八十歳以上の長壽者に天杯を下賜される旨が、新聞紙上に傳へられた時、私は飛立つやうに喜びました。そして、取敢へず兄上に御祝狀を差出しました。するに、兄上の御返事に、残念なごには、六箇月不足のため其の數に洩れられた。ごありました。私は非常に落膽しまして、縣廳に、ごの縣下でも、天杯下賜は滿八十歳以上か否かを尋ねに參る積りにきめてゐました。所が、翌朝の新聞で、數へ年で宜しい、調べ直せごの恩命があつた由の記事を見て、母上様、實に私は蘇生しました！

蘇生ご言へば思ひ出します。一昨年の夏、あなたが九

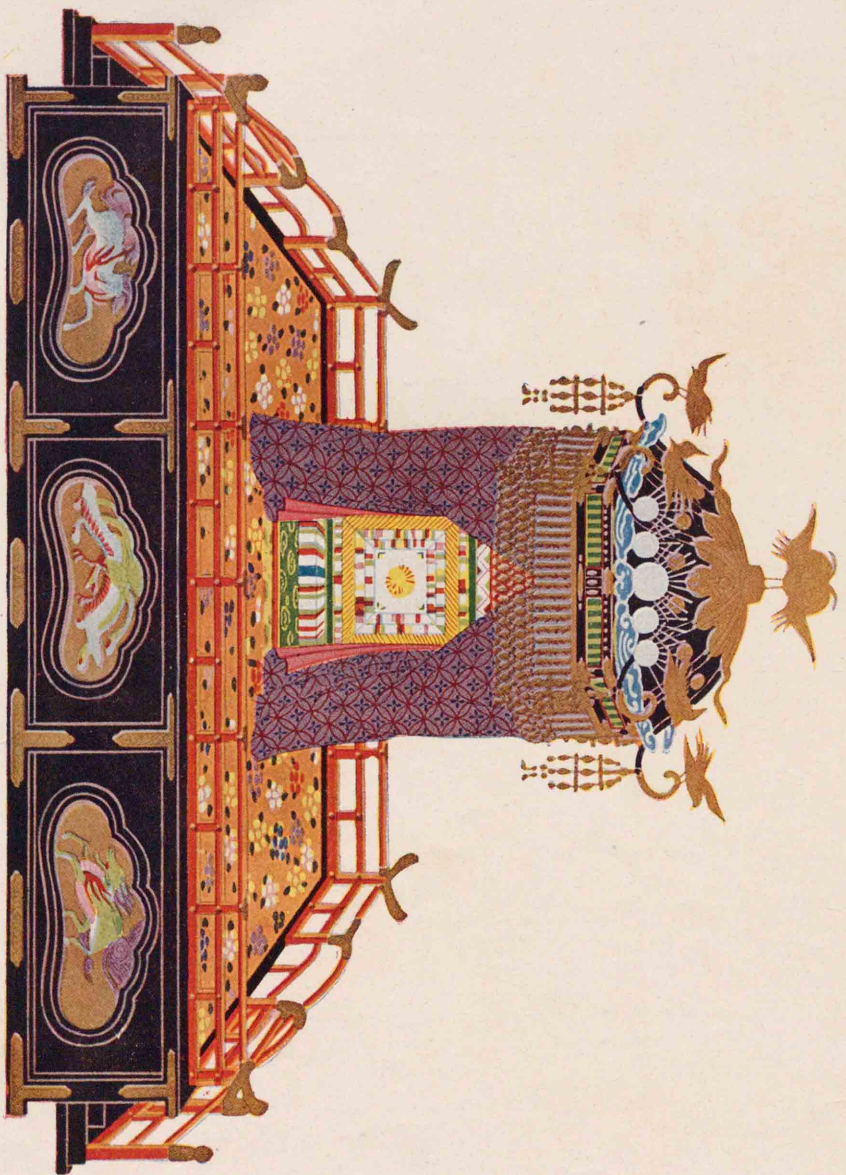
故郷有母
下の句は「旅館無人暮雨魂」藤原定家の愛吟
ふるさとに編者の作

死一生の場合、私はあなたの枕に取付いて、おつ母様、あなたは私の力です！」ご、無我夢中に叫びました。其の聲が昏睡状態のあなたのお耳に響きまして、此の皺くちやの婆を、子なればこそ力にも思つて居るのか。ご思はれ、それからあなたは、出来るなら助けて下さい。ご、氏神様に祈願なされて、奮發してお薬も飲まれ、お粥も啜られ、そして漸く恢復なされたのだご、斯うあなたから後日承つたのです。果して私が其の刹那「おつ母様、あなたは私の力です！」ご叫んだか否か、私の記憶には判然しません。併し、母上様、あなたは今でも私の力です！

「故郷有母秋風涙。」此は實際です。「ふるさとに老いた

此の度
大正四年十一
月十日、今上
陛下御即位禮

る母の在すなり、いたくな吹きそ秋の夕風。」此は赤子の至情です。たごひ、あなたの腰は曲り、視力は衰へ、歩行は自由でなくとも、「我に母あり！」この誇が、如何に遊子の意を強くして居ることでございませう。況や八旬の高齡で尚且壯者をも凌ぐあなたの御健在はよ！ 母上様、實にあなたは私の爲には千萬人力でおあり遊ばします！ 母上様、老人は家の寶であります。で、至尊に於かせられても、先づ老人を御愛撫遊ばすのでございます。聞く所によれば、我が國は世界でも名高い長命國ださうです。此の度天杯下賜の光榮に浴する高齡者が、四十萬人にも及ぶさうです。「養老」の朱杯に「酒肴料」までお添へ遊ばさ



高御座

斯生兩度説
 二佳辰、幸福
 如レ余有ニ歳
 人、大禮參
 加恩寵渥、
 偏祈ニ國勢
 五州振一
 大正四年
 奉ニ祝御
 大典一
 八十三叟
 秦山

秦山
 土方久元、伯
 爵、前宮内大
 臣、大正七年
 歿、年八十六

れるごか辱ります。四十萬人に天杯ご御酒肴料、これだ
 けでも大した御費用かご存じます。これを思へば、子た
 る者、孫たる者、親を慰め祖父母に仕へないで何ごしませ

斯生五年、及説佳辰、幸福如余
 乃我々大禮參加恩寵渥、
 偏祈ニ國勢五州振一
 大正四年奉ニ祝御大典一
 八十三叟秦山

大正四年奉
 祝御大典一
 八十三叟秦山

詩の祝奉典大御

う。孝が即ち忠です。親に仕へるのは君に仕へる所以
 です。母上様、私ども同胞があなたに盡すのは、恐多くも
 今上陛下の大御心に副ひ奉るのでございます。これを

思うて、私は幾夜か感涙に枕を濡しました。畏くも陛下は、何縣何郡何村大字何字何といふ片山里のあなたをば、非常に御鄭重に御愛撫遊ばされます。然るを、私、子たる私が、あなたにだけ盡して居りましたらう。思へば慚愧に堪へない次第です。端書一枚であなたの御心を安めるここが出来た時にも、あゝ此の不孝な私は、いやな夢を見たが、達者か。」と、あなたに問はれたことさへありました。

母上様、始めて夢が覺めました。どうぞ達者であつて下さい。あなたは私の力です！そして、私もあなたの力になります。別封、其の一部は氏神様への御神酒料です。

其餘りはあなたのお友達に一献差上げて下さい。氏神様のお蔭です、御近所の方々のお蔭です。お友達と御近所の方々も、皆して陛下の萬歳をお祈り下さい。私も、あなたのお蔭、皆様のお蔭、氏神様のお蔭によつて、地方賜饌の光榮に浴します。謹んで陛下の萬歳を祝します。

三 父母のなさけ

柳澤 淇園

余はいとけなき頃より詩歌の道を好み、たまく、作文などせし折から、稿成りて父に見するに、一として褒められたることなく、たゞ「無益のことなり。」とて、座右に投捨て置かれ、他の者のは褒め給へば、さりとては如何とのみ思ひ過しし

柳澤淇園
名は里恭、大和國の人、徳川末期の學者、寶曆八年(一四八)歿、年五十三

が、後に妻に迎へたる女の、物縫ふことの人に優れて、小袖など一日に一重ひとかさねづつ縫ひて、餘事までも事缺かず、物縫ふ職人の見ては驚くばかりに上手なりければ、余、或時、物縫ふことをひたぶるに愛で賞しける折、妻のいふ、三歳にして母に後れ、繼母に育てられ、五六歳より水仕の業を勤め、七歳より手習ひ物讀み裁ち縫ひを教へられ、實の子ならねば教訓足らずと、末に至りて謗られんは口惜し。』とて、常に厳しかりしゆゑ、羽根つく遊だにえせで、只物縫ふことなどのみに暇なかりつれば、折からは劇しき母よと思ひしかども、今となりては、物縫ふ業を人に褒められ侍るは、偏に繼母の情薄からざる慈愛なり。』といへるを聞きて、余がいとけなき頃の作文を

褒められざるの、いと有難きを思ひ合はせぬ。(雲萍雜志)

四里心

北原白秋

北原白秋
名は隆吉、福
岡縣の人、明
治十八年生、
詩人

笛や太鼓に さそはれて
山の祭に 来て見たが
日暮はいやく 里こひし
風吹きや木の葉の 音ばかり

かあさま戀しこ 泣いたれば
ごうでもねんねよ お泊りよ

しく／＼お背戸に 出て見れば
 空には寒い 菑雲
 雁 雁 棹になれ 前になれ
 お迎へ頼むご 言うておくれ (兎の電報)

五 私の少年時代

沼波 瓊音

私が高等小學校に在學中の頃であつた。受持の先生が、今度「少年園」といふ少年雜誌が出来たといつて、其の「發刊の辭」を教場で朗讀された。それが非常に名文なのに感服して了つて、私は早速購讀者になつた。それには私の求めるものが總べてあり、實に注文通りの雜誌であつた。近頃其の合本を取出して見ると、中村敬宇・依田學海・坪内逍遙・森鷗外などといふ先生達が、熱心に筆を執つて

沼波瓊音
 名は武夫、名古屋市の人、明治十年生、俳人、第一高等學校教授

中村敬宇
 名は正直、東京の人、文學博士、貴族院議員、明治二十四年歿、年六十

依田學海
 名は百川、漢學者、明治四十二年歿、年七十七

坪内逍遙
 名は雄藏、名古屋の人、文學博士

森鷗外
 名は林太郎、島根縣の人、醫學博士、陸軍文藝監、省圖書館長、帝室博物館總長、大正十三年歿、年六十三

藤井乙男
 兵庫縣の人、明治元年生、文學博士、京都帝國大學教授



中村敬宇

居られて、今讀んで見ても面白い。そして、寄書欄に、何々中學第何學年藤井乙男などといふ名が見えるのも、今見ると感が深い。私の父は雜誌が好きで、能く色々な雜誌を買つた。併し、其中に、私の爲には少年園、自分の爲には風俗畫報だけを取ることにした。父は、

「斯ういふ雜誌はいつ終るといふことがない。際限なく何時まで發行されるか分らぬ。さう思ふと氣味の悪いやうなものだ。鏡に鏡を寫して、際限なく互に寫つて行くやうに、氣味の悪いものだ。」と、こんなことを言つた。

少年園は多分少年雜誌の最初のものかと思ふ。其の後、「小國民」とか「少年文武」とかいふのも出て、それ／＼面白味があつたが、少年

園は地味だけれども堂々としてゐた。「日本之少年」が博文館から出た頃には、少年園はもう下り坂で、其の内になくなつたが、日本之少年は大層盛りがよくて、随分私達がつくに知つて居るやうな事柄がくどく書いてあつた。とにかく、日本之少年以前の少年雑誌には、教へるといふ部分が多くて、機嫌取の部分がかつた。昨今の少年雑誌には、ちと機嫌取の部分が多過ぎはしないかと思ふ。雑誌を讀んだり小説を讀んだりして、いつか文章の善し悪しを云々するやうになつたが、私の通つてゐた漢學塾の先生が、大變私を愛して下さつて、私の習ふ書物以外に、大きい人の習ふ書物の講義も、「これはあなたも聞いておきなさい。」などといつて、むづかしい本を當がはれて、よくお相伴しやうばんに聞かせて貰ふことがあつた。或日、文章軌範ぶんしょうきはんの「後赤壁賦」の講義を、此のお相伴で聞いた。大抵は分らなかつたけれども、又其の時に分つた所もすぐ忘れて了つたけれ

東坡
蘇軾、東坡は
其の號、宋の
文豪（1036—
1101）



蘇 東 坡

ども、人影じんえい地に在り、仰いで明月を見る。「といふ句だけ、ひどく私を喜ばせた。歩いて居ると、自分の影法師が地に映る。はてなと思つて上を見ると、もう明月が出てゐた。誠にその時の光景、東坡とうたの其の時の心持が、そのまゝ感じられるやうに思はれた。そして、塾から歸る途中に、この句のことを思つて、考へて見ると、これには飾もない、つまり、其のまゝ、有りの儘ままに書いてあるだけである。そこに非常な鮮あざやかかさがあると思つた。歸つて父に此の話をして、「つまり文章といふものは、有りの儘に書けばよいものだなあ。」といふと、父は「さうさ、しかし其の有りの儘に書くことがむづかしいのさ。」といつた。だが、其の時、私には父の此の言葉が分らなかつた。有りの儘を書

くの何のむづかしいことがあらうぞと思つた。

Aといふのが、級中で最も亂暴者と言はれてゐた。彼は非常に敏活な顔付をしてゐて、目が長く切れて涼しく、心もち皆が上つてゐた。家庭でいろんな物をねだることも評判であつた。或時先生が「萬國名所圖會」が大層よい書物であるといつて、其の一部を見せて下さつた。すると、一人の生徒が、小聲で、「又Aさんがねだるだらう。」といつた。果してAは早速此の書物をねだつて了つた。それを見ると、私も欲しくてたまらなくなり、やはりAと同様早速之を買つて貰つた。其の時はまだ四巻までしか出来てゐなかつて、あとは出来る毎に本屋から持つて来てくれた。

私が今日まで見た地理書の中に、此の書物ほど面白いものはない。地理も斯ういふ風に書いてあると、覚えまいと思つても覚えて了ふ。青木嵩山堂から出たものである。序文も本文も一切七

韻文

和歌・俳句・新體詩などをいふ、こゝは新體詩

解纜

舟が港を出ること

漫遊

方々を巡り歩くこと

史蹟

歴史の跡

彩象

彩色のある現象

愛玩

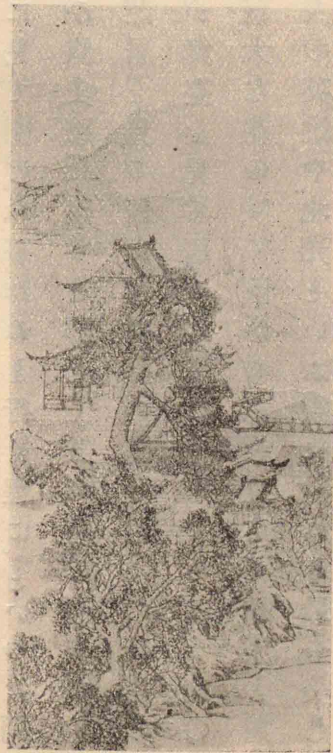
愛してもあそぶ

五調の韻文で、横濱を解纜して、アメリカに渡り、歐洲に遊び、それからアフリカ・濠洲・アジア諸國と、ぐるりと世界を漫遊して、日本に歸つて来る旅人の紀行の歌になつて居る。寫眞を欺く程の精巧な銅版畫が各頁の上半にあつて、下半に韻文がある。「船横濱を解纜し、房總の山を後に見て、明けぬ暮れぬと行く程に。」といつた調子である。地理といひ條史蹟に至ると、詳しく其の時の歴史が説いてある。パリでは、芝居を見る所には、舞臺の構造、色々の仕掛のことも書いて、劇の筋が舞臺を見て居る通りに書いてある。肉のやうな花瓣を持つた巨大な花の咲く國から、志を立てて歐人と肩を並べるに至つた黒人の英雄や、北光といふ空に現れる最も美しい彩象の下に、氷山の浮んで居る光景や、凡そ世界にありとあらゆる人事と自然とは、此の書物によつて、其の畫と韻文によつて、調子よく幼い私の心に刻み付けられた。私は之を愛玩する餘り、火事と

いふ時には、此だけを持出す爲に、それを黒い手提カバンに入れて置いた。

近頃發行される少年雜誌を讀んで、外國の異景異風の書いてある所を見て、大抵あの萬國名所圖會にあつたのを考へると、如何にもあの書物の内容の豊富であつたことに、今更のやうに感服する。

名所圖會の最後に出たのは支那・朝鮮の部で、全篇中最も精巧を極め、表紙に岳陽樓の繪があつた。高等學校在學の時、友人が支那へ遊びに行く際、此の支那の部を貸してやつたが、それなり紛失し



岳陽樓(吳春筆)

吳春
松村氏、別號は月溪、徳川末期の畫家、四條派の祖、文化八年(一七九一)歿、年六十

岳陽樓
支那湖南省
紛失
まぎれてなくなる

て、此の舊い愛玩書は遂に缺本になつて了つた。(凡人に聽け)

六 天龍川下り

和辻哲郎

いよく舟に乗込むと、舳先に立つて居る船頭が、櫂でばんばんと舷を敲く。其の音が霧を貫いて、水の上を遠くまで響いて行く。出發といふ波立つた心持が、如何にもふさはしく此の響に現されて居る。此の出發は、天龍下り全體の中で、最も印象の深いものの一つであつた。

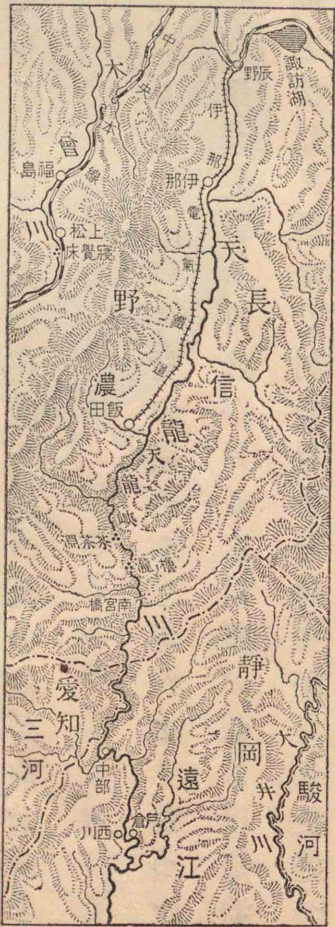
船頭は前に二人、後に二人居る。四人とも櫂を持つて居る。瀬の處に來ても、二つの櫂で船を操縦する。一二箇處瀬を下ると、すぐに天龍峽にはいつた。霧の中に、兩岸に切

和辻哲郎
兵庫縣の人、
明治二十二年
生、文學者、
東京大學教授

立つ山が見える。下方は全部巨巖である。其の間を船は一時間約七八哩の速力で下つて行く。河幅は狭いが、水量が多いので、急流の割合に危険な氣はしない。それよりも寒さと時々舷を越えて来る飛沫が氣になる。兩岸の巨巖は實に澤山ある、勿體ない。「贅澤だ」といふ言葉さへ使ひたいぐらゐに。紅葉はもう色が褪せかゝつて居るが、霧の間に隠見する所は誠に佳い。天龍峽にはいると、皆は「来てよかつた」といつたが、さういふ景色が絶えず變化しながら、何時までも續く。過去つて惜しいと思ふ隙もないぐらゐに後から後から現れて来る。

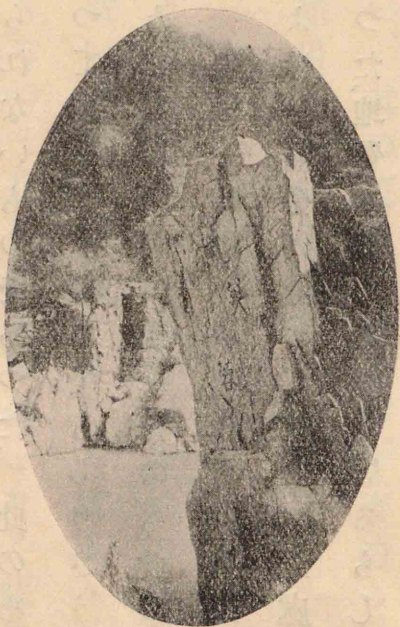
それが一時間も續いたであらう。受けた印象の量から

推せば可なり長かつた。人々はもう天龍川に親みを感じて、嘗て難船があつたといふ茶々淵に來ても、大して難所らしくは感じなかつた。難所に來る毎に、先頭の船頭はぱんくと舷を敲いて警戒する。其のぱんくといふ勇しい響を待つやうな氣分にさへなつた。始めて山が開けて村が見えた。橋があつた。其の橋の下流に、櫓の瀧と呼ばれる天龍第一の難處がある。餘り長



くもない瀬ではあるが、三丈三尺の落下があるといふ。舟は矢のやうに流れて行つた。舟底はがら／＼と石に打突かる。飛沫は容赦なく飛込んで来る。併し、船頭は櫂で巧に舟を導いて行く。下の淵に突進んだ時には、舟の舳先はもう岩を避けて居る。此の難處を通つたのは午前七時半頃であつた。

其の後は、追々山が開けて、村の見えることが多くなつた。霧も晴れた。畑が見える、竹藪が見える、川原がある。が、追つた山の間を抜けて、穩かな村の景色を見、やがてまた追つた山の間へとはいつて行く心持は、自分に取つては天龍峽よりも却つて好かつた。斯ういふ處にも人が住んで居る。



天龍峽芙蓉洞

さうして激しい自然と戦つて居る。それを眺めながら、長く長く流れて行く天龍川の心が、自分の胸にも通つて来る。此の自然と、さうして人間——人間の姿は此處にも見られるではないか。自分は河原の砂の上で遊んで居る子供の姿を見て、涙ぐましい心持になつた。天龍川としては、信濃の國境を越える前後のものであつた。岸に立つ巨巖はもう見られない。併し、烈し

い流が滔々と流れて行き、其の上を、木の葉のやうな舟が、水に揉まれながら、まつしぐらに落して行く感じは、前には見られないものであつた。此のあたりは、山の形もよほど違つて居る。南晝にでもありさうな山が三つ重なつて、突如として目の前に現れたのも此のあたりであつた。

午後一時過、王子製紙會社の工場のある中部まで出ると、よほど氣分が違つて来る。此處から山の形もすつかり變つた、地質が別になつて居るらしい。此の後、追つた山の間を流れて行くことは同じであるが、併し、暫くの間は感じが小さくなる。我々の氣分にもよほど倦怠の心持が加はつた。が、頓て二時間も経つと、西川^{さいがは}・戸倉といふやうな、妙に

感じの深い村に出る。戸倉の河原では、船大工が巧妙な槌の調子を取つて、船を修繕してゐた。其の邊からは谷も開けて、如何にも大河らしい氣分になつて行く。河原も大きい。其の荒涼の感じが、丁度迫つて來た夕暮と相應じて、天龍川下りの最後の三時間、また忘れ難い印象を我々に残した。やゝ倦れた氣持で、暮行く山と河とを眺めて居ると、其の倦れた氣持が、周圍の景色の中に生かされて來る。廣い河原の物寂しさは、丁度我々の心にふさはしい。薄暗くなつて行く水面の何となく味氣ない氣持は、最早我々を乗せて流れて行くのに倦んだやうに見える。船頭もまた倦んだ。併し、それでいゝ。頓て月が現れた。それも薄曇

りの空である。(思想に據る)

七 關が原紀行

上野山清貢

何時の間にかもう午後の陽が強く私の旅姿を刺すやうに輝き出した。

私はこれから宮上山の大谷吉隆の陣址を見ようと思ふ。其處には、彼と彼の忠臣湯淺五助との墓もあるからだ。關が原の戦は随分殺風景であつた。其の中で、吉隆のやつたことは何ともいへない情のある物語だ。

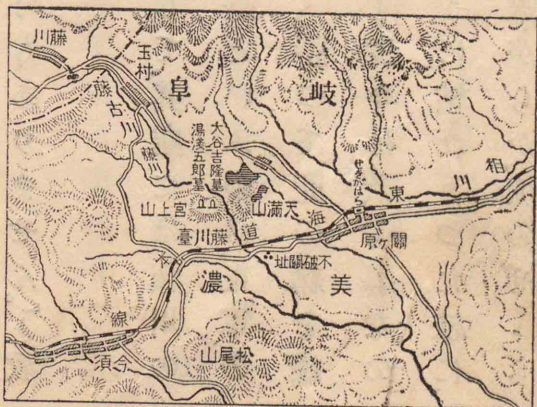
鐵道に沿うて、私は強い秋の陽を眞向ふに浴びながら歩いた。時々獵銃の音の響く外は、實に靜かな古戰場だ。

上野山清貢
北海道石狩國
の人、明治二
十二年生、洋
畫家

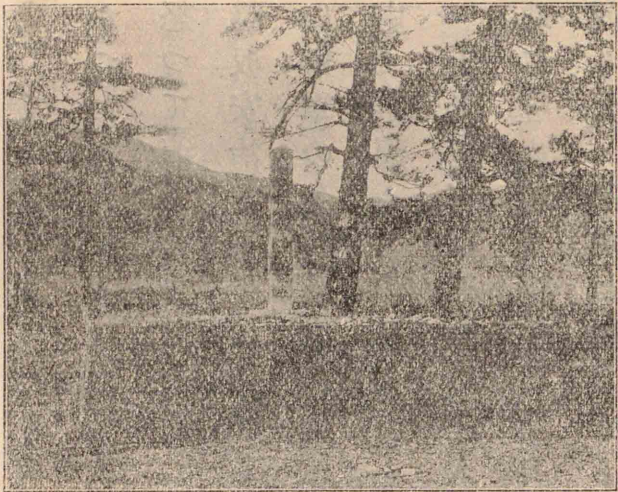
「藤川の臺といふのは何處ですか。」と、私は小學生らしい兒童に尋ねた。其の兒は割合に世馴れた口調で、「もうすぐです。其の道を右へ折れて行けば、二三町もありません。」と教へてくれた。

山道を進むと、梅林が澤山ある。そして、其處には「藤川の臺」といふ木標が立つて居る。藤川の臺といふのは、東軍の總大將徳川家康が、勝誇つた破竹の勢で、勝つて兜の緒を締めよ。」と叫んだ處だ。小さい平野だ。丁度今は秋も暮なので、其處にある無數の梅の木の骨のやうに枯れきつた枝に、名も知らぬ小鳥が飛廻つて居る。何處からか、流のせゝらぐ音が微に聞えて来る。私は梅の木の間に佇んで、暫くは

静けさに身も心も滅入るやうに感じながら、黙つて其の静寂に恍惚としてゐた。さつと吹いて来る秋風に、赤くなつた柿の枯葉がかさかさとして寂しく落ちる。頓て私は其處を立去つて、細い山道を急いだ。三四町ばかり奥へ進むと、道は愈々細くなる。見返ると、もうよほど傾いた夕陽は、松林を赤く染め、取分け藤川の向ふの天満山を美しく照して居る。それを振り返りながら、私は濕りがちな山道をずん／＼と登つた。私の訪ねようとする吉隆の墓は其の上にあるのだ。



小早川秀秋
小早川隆景の
養子



關が原古戰場

吉隆は石田三成とは親しい友人だつた。彼は常に病魔に悩まされてゐた。彼は盲目であつたけれども、非常に直觀力の鋭い、智謀の勝れた男で、西軍には無くてならない人間だつた。彼は關が原の役が西軍の敗北に歸することを疾くから看破してゐたが、三成との交誼を忘れることが出来ないのだ。其の行動を共にしてゐた。吉隆は松尾山に陣取つて居る小早川秀秋の態度に不審

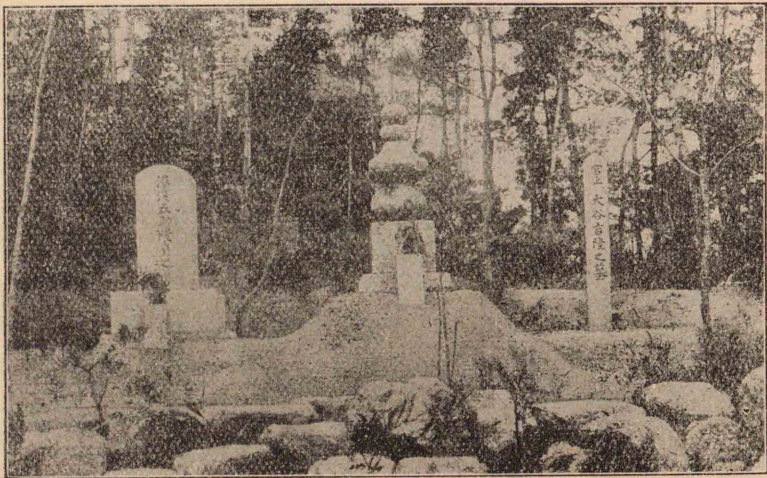
を抱いてゐた。秀秋が家康と謀を通ずることを非常に警戒してゐた。其のため、彼は松尾山を離れることが出来なかつた。果せるかな、秀秋は反旗を翻した。吉隆は大いに怒つて、直ちに秀秋を討たうとした。併し、其の時には既に脇坂安治も家康に内應して、秀秋に加勢してゐた。其の内に東軍の名將藤堂高虎も攻めて來た。吉隆はとう／＼其處で割腹して憤死した。

吉隆の老臣五助は、主人の痛ましい最期を見て、其の首を地に埋め、槍を揮つて單身高虎の陣に突入した。そして戦死した。高虎は「敵ながらも天晴の人間だ。」と感心して、此處に吉隆主従を埋葬したのだといふ。今、私が是から訪ねよ

宮上大谷吉隆之墓
湯淺五助隆貞之墓

うとするのは此の二人の墓である。

松の樹の間に、長い月日の間雨風に曝されて來た五輪の塔が立つて居る。此が吉隆の墓だ。其の左に五助の墓がある。折からの夕陽が赤く此の二つの石碑を染めた。赤々とした空氣の中に、赤蜻蛉が無數に舞上つた。
(週刊朝日)



大谷吉隆主従の墓

若山牧水
名は繁、宮崎
縣の人、明治
十八年生、歌
人

八 草鞋よ

若山牧水

草鞋よ

お前もいよく切れるか

今日 昨日 一昨日

これで三日履いて来た

履き上手の私ご

出来のいゝお前ご

二人して越えて来た

山川のあごを忍ぶに

捨てられぬ思がする

なつかしい草鞋よ (旅)

薄田泣菫

名は淳介、岡
山縣の人、明
治十年生、文
學者、大阪毎
日新聞記者

九 渡り鳥

薄田泣菫

私達が七つ八つの頃には、そろそろ秋が更けて來ると、晴れきつた空を、毎日のやうに雁が渡つた。私達はそれを見掛けると、吹きさらしの野路に立つて、空の一方を振仰ぎながら、

「雁よ 棹になれ 棹になつたら 鍵になれ」

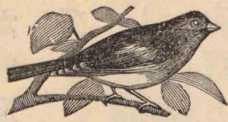
と、其の長い行列が次第に雲の中ににじみ込んで了ふまで、聲を囁らして叫んだものだ。併し、何時の間にか雁も少くなつて、今では、晝間その長い列が空を渡るやうなことは、よくよく人氣の遠い野原か何かでないと、滅多に見られなくなつた。

渡り鳥の初客といつたら、——さやうさ、先づ鶇うすとでも言
つて置かう。——秋の彼岸が過ぎて、そろ／＼日影が黄色が
かつて来ようといふ頃、私達は、どうかすると、暖い日の午過
ぎ、そこらの木立で、甲の高い、鋭い聲を
聞くことがある。あゝ、もう秋だなと、
思はず振返つて見ると、矮小な櫟に交
つて、づぬけて背のひよろ高い楡の木
に、鶇が一羽止つて、黄色な夕日を受けて、羽莖が金のやうに
きら／＼して居るのが見える。私達は、其の瞬間、言はうや
うのない強い健かな氣持が胸に流れるのを覚える。
鶇の次には鶇ひたをが来る。山家の午過ぎ、懶さうな蟋蟀の聲



鶇

も何時の間にか鳴き止んで、枯葉一つ寝返りを打つ音まで
が、はつきりと耳に入る静けさの底に、何處からともなく、微
かな聲が洩れて来て、何の音とも分らない。すると、木蔭の
萑あし島か何處かで、餘念もなくせつせと仕事に精出して居る
農夫が、ひよいと顔を擧げる拍子に、すぐ鼻先の小
枝から、枯葉のやうな小鳥がついと身を反らして、
鶇ひたを逃げて往つて了ふ。それが鶇だ。鶇といつたら、
まるで悲哀でも抱いて居る人のやうに、大抵は連
にはぐれて、唯一羽で来る。そして、そこらの小枝に止るな
り、ひよくり／＼と軽い御辭儀をして、囁くやうな聲で唄ひ
出す。



鶇

蝶蛸
蝶蛸(かまきり)の卵の塊

鶉が来てから、ものの十日も経たぬ中に、また四十雀しじゅかが来る。此の鳥は鶉と違つて、十羽も二十羽も群を組んで来る。山から里へ移る時などには、まるで時雨でもするやうに、細かい羽音がさつと空を掠めて聞える。そして、そこらの木立におろすなり、眩しい程すばしこく蝶蛸かまきりなどを啄き廻しながら、鼠色の背を反らし、柔かみのある胸の圓みを見せて、銀の鈴を振るやうな透徹つた聲で、早口にしやべり續ける。小雪がちらつく頃になると、鶉みせきが来る。此は鶉と同じやうに大抵獨法師で、それもこつそりとあたりを忍ぶやうにして来る。初冬の午過ぎ、山近い田舎の小家で、爺は炬燵



雀 十 四

に靠れ掛つて、こくりくと轉寐をする。其の側で、婆さんはせつせと糸車を繰つて居る。煤けた障子に、檐に吊るした干菜の影が見すぼらしく映つて、時折ちつぽけな小鳥の影がちらついたりする。どうかして糸目が切れて、眠さうな紡錘つむぎの音がぱつたり止むと、こそくと掛菜を巻る音がするが、老人の耳にはそんな音の聴取れやうがない。婆さんは俯いたまゝ、糸を紡ぎに掛る。さうかうする間に、鳥は舌打をするやうな聲を立てながら、ひよいくと小刻みに籬を傳つて、隣から隣へと、狭苦しい物蔭を出たりはいつたりして移つて行く。



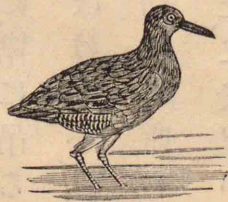
鶉

鷓鴣と後先になつて頬白が来る。冷たい雨のびしよびしよと降る中を、獨者の頬白が、灰色の胸までびしよぬれになつて、しよんぼりとそこらの木に止つて居るのを見ると、私の國では、此の鳥の鳴聲を解いて、

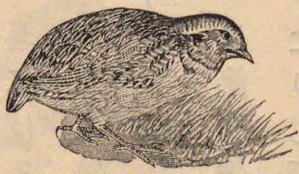
「一筆啓上仕る。子供泣かすな。火の用心。今度の便りに金十兩、やりたいけれど、一文も御座なく候。」

と言傳へられるのを思ひ出す。

後の雜木林にこんな小鳥が来る頃になると、野らにはもうそろ／＼鶉が來、鶉しきが來て居る。



鶉



鷓鴣

一〇 友の消息

一 ロンドンへ

僕はもう駄目になつて了つた。毎日譯もなく號泣して居るやうな次第だ。新聞雜誌にも少しも書かぬ。手紙は一切廢止。それだから御無沙汰して濟まぬ。今夜はふご思ひついて、特別に手紙を書く。何時かよこしてくれた君の手紙は非常に面白かつた。近來僕を喜ばせたものの隨一だ。僕が昔から西洋を見たがつてゐたのは、君も知つて居るだらう。それが病人になつて了つたのだから、残念でたまらないのだが、君の手紙を見て、西洋へ往つたやうな氣になつて、愉快でたまらぬ。若し書け

るなら、僕の目の明いて居る内に、今一便よこしてくれぬか。(無理な注文だが。)

不折は今パリにゐて、コーランの處へ通つて居るさうぢやないか。君に逢うたら、經節一本贈るなごと言うて



虚子規筆

るたが、もうそんなものは食つて了つてあるまい。

虚子は男子を擧げた。僕が年尾に命名してやつた。

鍊卿死に、非風死に、皆僕より先に死んで了つた。

僕は逆も君に再會することは出来ぬと思ふ。萬一出

不折 中村鉦太郎、
東京市の人、
慶應二年生、
洋畫家
コーラン
フランスの畫
家
梅さげて來
る禮者や七
日過 規
虚子 高濱清、松山
市の人、明治
七年生、俳人
鍊卿・非風
共に子規の俳
友

來たとしても、其の時には話も出来なくなつて居るであらう。實は生きて居るのが苦しいのだ。
書きたいことは多いが、苦しいから許してくれ給へ。
明治三十四年十一月六日燈下に書す。

漱石 兄

東京 子規拜

二 ロンドンから

其の後は頓に御無沙汰をして濟まん。君は病人だから、固より長い手紙をよこす譯はなし、虚子君も編輯多忙で、ホト、ギスだけを送つてくれる位が精々だらうとは、

子規 正岡常規、松
山市の人、俳
人、明治三十
五年歿、年三
十六
漱石 夏目金之助、
東京市の人、
英文學者、文
學者、東京朝
日新聞社員、
大正五年歿、
年五十
ホト、ギス
月刊の俳句雜
誌

出立前から豫想して居つたのだから、手紙の來ないのは
 さまで驚かないが、此方はロンドンといふ世界の勸工場
 のやうな馬市のやうな處へ來たのだから、時々は見たと
 ご聞いたことを君等に報道する義務がある。是は單に
 君の病氣を慰めるばかりでなく、虚子君に、何でもよいか
 ら書いて送つてくれと二三度頼まれた時に、へいへい宜
 しい御座いますと氣輕に受合つたのだから、手紙を書く
 のは僕の義務さ。それは承知だが、僕も遊びに來た譯で
 もなし、醉興にまごついて居る仕儀でもないのだから、成
 るべく時間を利用しようと思ふのでね、ついでいづ方
 へも無音になつて、誠に申譯がない。

四月九日
 明治三十四年

四月九日夜

漱石

子規 君
 虚子 君

三 ロンドン消息

夏目 漱石

僕の下宿の體裁は、前便に申述べた通り、頗る憐れつば
 いものだが、さういふ心細い處に、三十代の顔子のやうな
 氣持で能く澄して居られることだ、君は不審を起すか
 も知れないが、僕ごとも御存じの如き俗物である以上、こ
 んな窮屈な活計をして、回や其の樂みを改めず、賢なるか

顔子
 名は回、孔子
 の門弟

な。』と譽められようなごは無論思つてゐない。たゞ己むを得ないので、厭々ながら辛抱して居るのだごさへ察して貰へば、それで澤山だ。

僕だつて留學生の學資全體を衣食住の方へ廻せば、いくら物價の高いロンドンでも、もう少し樂な生活は出来るのだが、自分は又普通りの書生に立返つたのだごいふ感じが強く起るの、折角西洋へ來たのだから、ならうことなら一冊でも餘計に専門の書物を買つて歸りたいごいふ欲望が僕を高壓的に支配するの、少しの不自由は我慢しなければならぬごいふ氣になるのだご思つてくれ給へ。十年前、大學の寄宿舎で、雪駄の踵のやうな

本堂は十八
間の案哉
漱石

堅いビフテキを食つた經驗のある僕は、苦しくなるごあの時分のことを回想して、一人で一人を慰めて居る。

併し、冬のひゆうく風が吹く晩に、ストーヴから烟が逆戻りをして、室の中が一面真黒に燻る時や、窓ご戸の際



蹟筆石漱

間から、其の寒い風が遠慮なく這入込んで來て、股から腰のあたりを堪らなく冷たくする時や、板張の椅子が堅いので、尻が疝氣持見たやうに痛くなる時や、自分の着て居る着物が段々變色して來るにつけて、自分が段々下落す

るやうな情ない心持になる時は、畢竟何の爲にこんな切詰めた生活をするのだらうと、自分で自分を疑つて見たくなることもある。

そんな時には、仕方がないから、ステッキでも振廻して、氣を紛らす爲に、何と云ふ目的もないのに、矢鱈とそこいらを散歩するのである。併し、其の散歩がまた鬱した自分を晴々とした心持に変化させてくれるとは限らないのだから困る。先づ往來へ出て見ると、會ふ者もくゞみんな丈が高く、立派な顔ばかりして居る。それで第一に氣が引ける、何となく肩身が狭くなる。稀に向ふから人並外れて低い男が來たと思つて、擦違ふ時に念の爲に

丈を比較して見ると、先方の方がやつぱり自分より二寸がた高い。それから、今度は變に不愉快な血色をした一寸法師が來たなと思ふと、それは自分の影が店先の姿見に映つたのである。僕は醜い自分の姿を自分の正面に見て、何遍苦笑したか分らない。或時は僕と共に苦笑する自分の影まで見守つてゐた。さうして、其のたんびに、黄色人種とは如何にも好くつけた名だと感心しないことはなかつた。(下略) (漱石全集)

一一 世界三都の印象

鶴見祐輔

フランス人は勤勉な國民である。イギリス人も勤勉な

鶴見祐輔
群馬縣の人、
明治十八年
生、鐵道書記
官

國民である。併し、其の勤勉さには相違があるやうに思はれる。勤勉それ自身に本質的の差がある譯はないけれども、英佛人の勤勉性の差は、單に外形的・形式的相違だけには止まらぬやうである。それは兩國國民の國民性の相違から生ずるのではあるまいか。然らば、其の國民性は如何に相違して居るだらう。こんなことを考へながら、私は一人で能くパリの公園を歩いてゐた。そして、之にアメリカを今一つ加へて、能く三國の國民性を比較して見た。

三國の特色は其の大都會に於て著しく眼に着く。それは、都會は其の國の國民性を最も鮮に映出して居るからである。人はニューヨークは餘りに歐洲化して居ると言ふ

が、併し、ニューヨークに一日居ると、我々はアメリカの大空気が全身に躍動するのを意識せずには居られない。ニューヨークはやはり米國である。そして、ロンドンは英國であり、パリは佛國である、恰も東京が日本であるやうに。

話はまた英佛人の勤勉性に還る。朝早くパリの街を歩くと、石の舗道の上にはもう綺麗に打水がしてある。凱旋門のあたりの廣場には、花賣の露臺が幾つともなく立竝んで、新聞賣の小舎と共に、心地よい朝の活動を象徴して居る。黒い質素な着物を着た女達が、耳に快いフランス語で笑ひ興じながら、忙しげに花に水を灑いだりなどして居る。

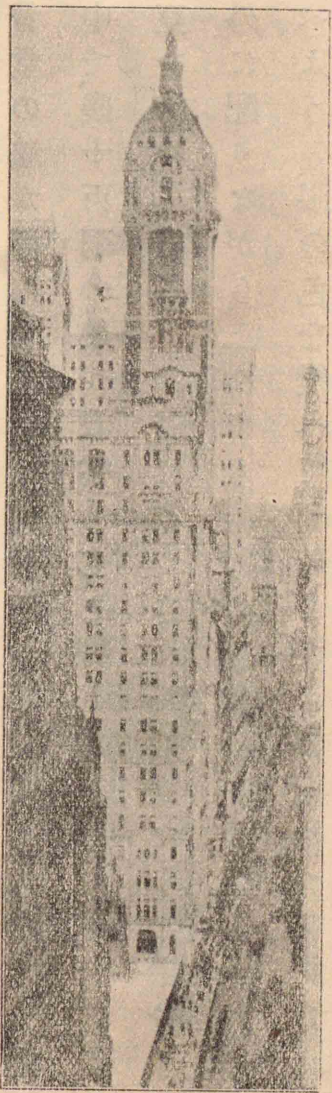
ロンドンの下町に晝頃行くと、狭い側道の上に、商館や銀

行などのクラークかと思える若者が、帽子も冠らずに、何百人となく忙しげに往來して居る。私は此の群の中を縫ふやうにして歩きながら、遠いアフリカや印度の貿易をデスクの上でやつて居る此の人々の日常の生活を考へて見た。そして、フランス人とは種類の違ふ此の人々の勤勉さをも考へて見た。こんな時には、何時もフランスの小説家クルヴァンの言葉が脳裡に閃いた。「佛國人は蜜蜂のやうに勤勉に、英國人は蟻のやうに精勵である。」と。パリとロンドンとの生活を見て居る中に、此の言葉の深い意味が、日一日と自分の頭腦に深く沁みて行つた。晴渡つた初夏の日盛り、寸刻の隙もなく、花から花へ蜜を求めて翔つて行く可

クルヴァン
Conlewin, フ
ランスの女流
小説家(一七
〇〇)

観音堂
東京市淺草公
園内の金龍山
淺草寺のこ
と、天台宗

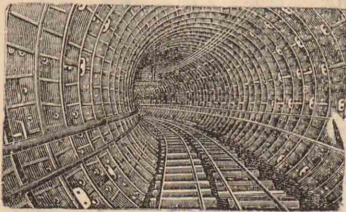
憐な蜜蜂の勤勉が、如何にも能く佛國人の朝起の心持を現して居るやうに思はれた。そして、來るべき冬の支度のため、營々として重い餌を引摺つて行く健氣な蟻の精根が、如何にも能く英國人の勤勉を現して居るやうに思はれた。それならば、米國人のあのいらくした忙しさは何に喩へられようかと考へて見た。私の頭の中に、ふと淺草の觀音堂の鳩が浮んで來た。何時行つて見ても、大勢の人込の中で、幾千百羽の鳩が我劣らじと押しあひへしあひ、地上の豆を拾つて居る。物音に脅かされて飛立たうと、半分氣を外に配りながら、それでも眼前の豆粒は一つでも餘計に食べようと、眼の色を變へて何時までも餌を拾つて居る。米



街市ク-ヨ-ユニ

國人の勤勉は正に此の鳩のやうに餘裕がないと、私には考へられた。

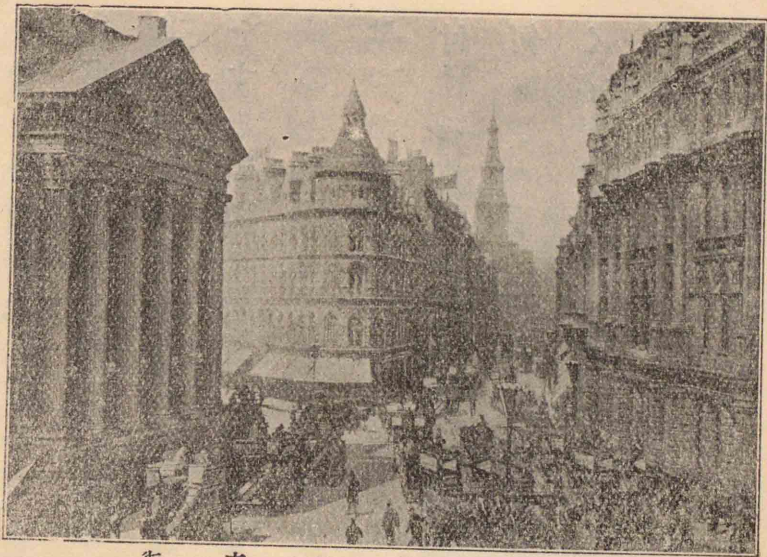
朝の出勤時間頃に、ニューヨークの地下鐵道に乗る人々は、是が此の世ながらの阿鼻叫喚ではないかと思はれるやうな雑沓を目撃する。或日、私は汽車の切符を買ひに市内營業所に行つた。



部内道鐵下地

大勢の客が群集してゐた。係の若い米國人が、私の行先と列車とを聴取り、頓て右手の袖を一寸捲り上げて、鉛筆持つ其の手を切符の紙の上で左右に五六回激しく振つた。何ををするのかと呆氣に取られて見て居ると、忽ちかつと手を紙の上に落して、するくくと切符の文字を眼の廻るやうな早さで書終へた。只今手を振つたのは、つまり手に運轉を付ける爲だつた。私は噴き出すやうな可笑しさを感じた。何もさう手に運轉を付けないでも、大して時間に相違もなく字が書けようし、又運轉を付ける時間だけ無益のやうな氣がした。

其の翌年、私は英國の商務院の鐵道局に、賃金引上の一覽



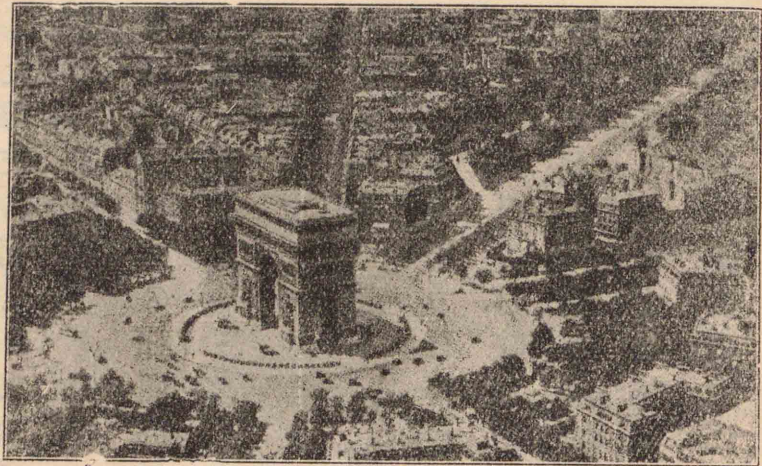
ロンドン市街

表を貰ひに行つた。すると、
 係の若い英國紳士が「確か此
 の机の中に一枚だけ統計表
 を入れて置いた筈だ。」といつ
 て、自分の机の抽出を開けた。
 私は見るともなく其の抽出
 の中を覗き込んで見て驚い
 た。まあ何といふ多数の書
 類だらう、累々と種々な紙片
 が堆積されてある。それを
 件の若い紳士は手を突込ん

杏

でがさく／＼と搔廻して、「此處にはない。」といつて、次の抽出、又
 其の次の抽出を開け、そして最後の抽出の底から、やつと賃
 金表を見付け出した。「此は差上げる譯に行かないから、此
 處で見て下さい。」といふから、一度見ただけでは逆も覺えら
 れませんね。」と答へると、一寸當惑して、「それでは私が寫して
 上げませう。」といつて、それを別の白紙に筆寫し始めた。ニ
 ユーヨークならば、傍に居る若い女のタイプストに命じて、
 一分間内に寫させる所であるが、件の若い紳士は、先づ自分
 の机の上の吸取紙の上に原本の統計表を置いて、其の上に
 白紙を當てて書出した。私は一寸面喰つた形で、此の異様
 な淨寫法を見てゐた。すると、彼は白紙の上に數字を一行

書いた。そして、今度は其の白紙を左手で持上げて、下の原本を覗いて、次の行の數字を諳記して、又白紙を其の上にべたりと置いて、諳記しただけ書いて、又前のやうに紙を持上げて、原本を覗いて、又其の上に重ねて書いた。不思議な遣り方だと思つて居ると、頓て書終へた。インキが乾いてゐない。そこで、今度は其の紙と原本と二枚持上げて、下敷になつて居る吸取紙の上に裏向に置いて、叮嚀にインキを拭取つて、さて私に其の淨書をくれた。ニューヨークから到着したばかりの私は、全く呆氣に取られて此處を出て行つた。そして、幾回となく鉛筆持つ手を振つて運轉を付けて、猛烈な勢で切符の文字を書いた米國人と較べて考へて見た。



パリ市街

其の春、パリの郵便局に書留小包を出しに行つた。慣れない私は、誤つて受取人の欄へ自分の住所・氏名、差出人の欄へ先方の住所・氏名を書いてゐた。之を局の小窓から差出す時、私はふと氣付いて、「おや」といふと、局員の佛國人がつとペンを取つて、受取人といふ字を抹消して、差出人と書き、差出入といふ字を抹消して、受取人と書いた。成程これで送票は完成

した譯だ。而もそれがほんの一瞬間だった。私は全く感心して了つた。そして、ニューヨークの切符賣と、ロンドンの役人と、パリの郵便局員とを頭の中で列べて見た。——鳩と蟻と蜜蜂と。

一二 義士の討入

村上浪六

昨日より降りに降つたる大雪の何時しか霽れて、仰げば極月十四日の月皎々と高く空を照し、見渡せば滿地の積雪皚々として一點の塵埃なく、而も曉近き寒風に凍りて、これ幸に脛を没せず、踏むに音あれど、四方は寂寞たる今や無聲の乾坤、其の眞白の中に物凄き一團の黑影、敵の大門を望ん

村上浪六
名は信、堺市
の人、慶應元
年生、小説家

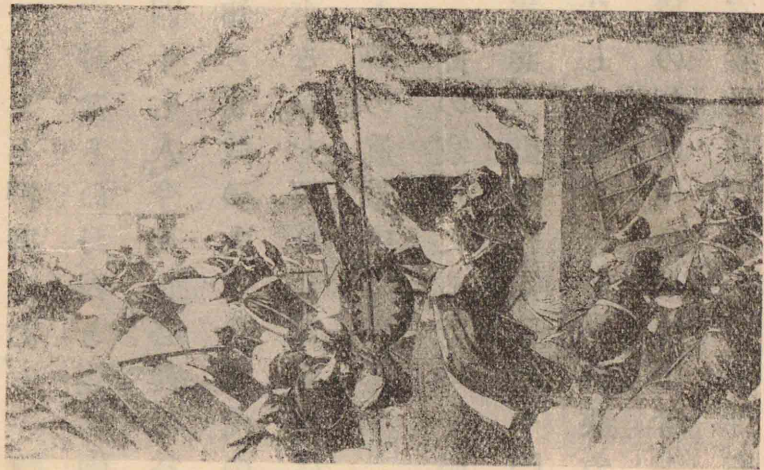
極月
十二月のこ
と、こゝは元
祿十五年

で肅々と押寄せぬ。

神ならぬ身、表と裏の兩門より、二年越しの遺恨を含みし四十七人、今夜を必死の益荒雄が、我が寢首を狙ひ來るとも知らず、此の大雪を風流の友として、忘年の茶の湯を催し、又來る春を契りながら、更は闌け客は散じて、主従こゝに安けき夢の眞最中。

此の寂寞たる乾坤を破りし内藏助の一聲「かゝれ」の大喝諸共、二挺の竹梯子はや門脇の長屋に掛ると見るや、武者振ひして待兼ねし一番乗の大高源五、續いて片岡源五右衛門、猿の如く傳ひしは小野寺幸右衛門、武林唯七、吉田澤右衛門、富森助右衛門、矢田五郎右衛門、何れも落來る雪を頭上に浴

内藏助
大石良雄の通
稱



びて攀登れば、誰かは後るべき、我も我もと先を争ふ中に、待たれよ老人」と呼ぶ聲を耳にも掛けず、今茲八旬に垂んたる堀部彌兵衛、老の力足踏み目を怒らしながら、皺枯れたる物凄き聲に、「えい、えい」と叫んで乗越えぬ。

上より外の梯子を引揚げて内へ掛け下す間もあらせず、氣早の面々ひらり／＼と身を躍らして飛込めば、原惣右衛門屋根に立ち

ながら、天地に照添ふ月と雪とに邸内の棟敷を見渡して、「あれよ、それよ。」と頻りに指圖せし脚下つるりと踏込らし、どつと落ちしが一念の早業、むくりと跳起きて、「かゝれ／＼。」

物音に夢を破られし門番の足輕三人、寢惚眼に狼狽へ出づるを、忽ち引捕へて高手小手に縛めぬ。

内藏助は表の門を背にしつゝ、心に神明を拜し、眼を四方に配りながら、身動きもせざる雪中の仁王立、兩脇には旨を承けて指圖役の原惣右衛門と間瀬久太夫。

何れ劣らぬ一味の中にも、豫ての定め、屋内へ斬入るべき片岡以下の九人は固より虎穴に飛込む勢、生きて再び屋外へ出でざる覺悟、月に閃く白刃を拔連れ、槍の穂先を争うて

淺野内匠頭
名は長矩
上野
吉良義央、通
稱上野介

降積りし雪を白波の如く蹴立てながら、蕎麥地に玄關へ馳向ひ、各、今を一期の大音聲に呼ばはりぬ。「淺野内匠頭の舊臣ども、上野殿の御首級を申受けに參つた。推參、推參。」と言ひも終らず玄關の戸を蹴破り打破り、わつと喚いて眞先に躍り込みしは小野寺十内の養子幸右衛門、流石に敵も武士なり、心得たりと立出でしを、出合頭の矢聲諸共、横薙ぎに高股を斬つて落して其のまゝ奥へ行かんとすれば、廣間の床脇に立並べたる幾張の弓ばらくと一拂ひに弓弦を切つて進みたる當意即妙、後々までも感稱の種となりぬ。

西の裏門は大石主税良金、其の後見は吉田忠左衛門と小野寺十内の二人、之に従ふ面々は二十一人。表門に時を合

はせ氣を合はせ、それと言ふや、一黨中に大力の杉野十平次と三村次郎左衛門、満身の勢猛く大槌を振うて、續けざまに三四度、吼ゆるが如き聲諸共打叩けば、扉は破れ門は折れて、どつと屋根より落來る雪崩を浴びながら眞黒に込入りぬ。東西兩門より聲を合はせ力を合はせ勢を合はせて、今や室内に戰の鬨なる時、大石主税左右に向ひ會釋しながらの挨拶、二老の御後見、最早有難く受けました。此の上は、初心者ながら主税これに罷在る。屋外の隅々、其の他の人知れぬ物蔭に、如何様の敵のあらうも知れぬ折柄、御苦勞ながら一わたり御見廻り下されたい。「や、申されたぞ。さうなうて叶はぬ筈。天晴大夫の子息ぢや。」と、吉田と小野寺の二人各、

左右に分れて立去りしが、果して人知れぬ物蔭より、隙を窺ひ味方の不意を覘はんとする敵五人の中、老いたれど早業の吉田忠左衛門に目敏く認められ、

其の槍に縫はれしもの二人、又小野寺十内の槍に突伏せられて、後に斃れしもの三人。

十内其の槍の穂を雪中に突込み、血糊を拭ひながら見上



大石内蔵助良雄銅像

ぐれば、隣家は土屋主税の屋敷、堀越しに固めし高張提燈を雪に照して、物々しき警固の體、隣家の情誼に吉良家へ助太刀するかと見れば見らるゝ有様に、折しも來合はせし原惣右衛門と片岡源五、右衛門諸共、其の堀際に近く寄添ひ、各三人の名を名乗りながらの大音聲、我々は播州赤穂淺野家の舊臣ども、亡主への供物を頂戴致さうとて、今夜これへの推參、他家様へ對して毛頭の慮外は仕らぬ。あはれ武門の御情、何卒々々此のまゝ御見遁しを願ひたい。言葉は低く一應の禮儀を盡せど、若し堀を乗越えて敵に味方をすれば、まだ冷めぬ血刀と血槍の熱を浴びせて、片つ端より打取らんとこの勢、暫し其のまゝ見上げしが、高張も動かず、人數の聲も

せず、靜まり返りて我が屋敷を打守る體。

此の時は既に東西表裏と屋内屋外、もはや出るほどの敵を斬靡けて、相手なき刀槍を提げながら、此處ぞと思ふ奥深き一室へ踏込みしが、有明の殘燈薄暗き下に、架けたる刀の金色のみ光を放ちて、枕も轉びし儘の重ね夜具は蛻の殻、手を差込めば夢を破りし證跡、まだ微温あり。それといふ言下に忽ち四方へ駈散りて、あらゆる室内の隅々まで捜し廻りしが、天を翔りしか、地を潛りしか、更に影なく音もなく、何時しか東雲の横雲より白みかゝりて、夜は將に近く明けなんとす。

偕は今までの苦心も水の泡かと、一同少し弱れる折柄、老

功の督勵はつと一時に氣を取直して、又もや四方八方へ手を分け足を飛ばせしが、臺所口に打續く長屋尻の間に一棟の物置小屋、外より鑰を懸けて人のあるべき筈なしと、今まで通りすがらに見遁せしも、尋ねあぐみし耳を欬てて忍び寄れば、何とやら微に物の動く氣配。五六人其の前に駈集りて戸を蹴破れば、奥より拋出す炭俵。偕はと打拂ふ間もあらせず、飛來る一人を三村次郎左衛門矢聲諸共に袈裟がけに斬る。續いて飛出る者共を四方より斬斃せば、殘る最後に絶體絶命の一人、小刀を抜いて現れし眞正面より、間十次郎の槍玉ぐさと刺せば、武林唯七また肩先の一刀、視れば一個の老體なり。白無垢の小袖を血に染めて、まだ死に切

れぬ氣息奄々。「やあ、白無垢の小袖。」「たゞものでないぞ。」「聞及ぶ年輩。」「若しやそれでは。」「用意の小笛は音冴えて、曉の空に響き渡りぬ。何れも我を忘れて駈來る一黨、前後左右より立寄りて首筋を捉へ、其の額を打守れども、老の皺のみ、それかと思ふ創痕もなし。更に引出して小袖を脱がすれば、あら嬉しや、紛ふ方なき先君が無念の御太刀筋、消えもやらず二年越しありくと残りぬ。大願成就、今更胸に迫りて言葉も出でず。急き來る涙に兩眼を曇らせ、中には嬉しさの餘り大地に打伏し、聲を揚げて雪中に號哭する者さへあり。

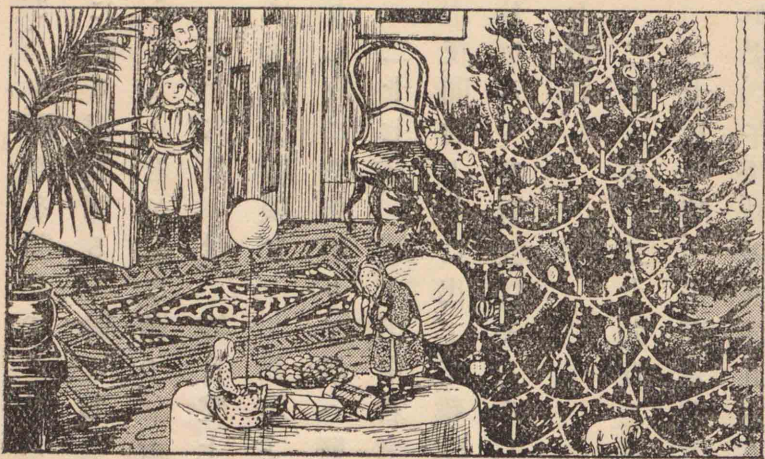
表の門脇に縛め置きし番人の足輕を連來りて、いよく

其の人と定まるや、内藏助は靜に進み、一刀すらりと引抜きぬ。「淺野内匠頭の舊臣四十七人、吉良上野介殿御首級を申受ける。」「凜たる一言、まだ息絶えぬ上野介が咽喉元ずばと止めの一刀刺貫き、其のまゝ振返りて、間十次郎首級を揚げい。」「それとも知らぬ槍先の功名、身に餘る面目、武士の冥加に叶ひし間十次郎、御免なりませ。」と一黨に會釋しながら、打落せし首を改めて内藏助の實檢に供ふれば、取圍みし四十餘人の同志、思はず一聲に勝鬨を擧げぬ。

小野寺・片岡・原の三人各、又姓名を名乗りて、堀越しの土屋家に挨拶、只今これに本望相達し、上野介殿御首級を申受け、引取る所、先刻より不慮の騒動を御耳に入れ、何とも恐れ

入る次第、一同の者に代りて御挨拶申上げまする。」一黨更に兩分して、其の一半は邸内を押廻し、長屋々々の戸を槍の鑄に打叩きながら、もはや引揚ぐるぞ。出合ふ者は出合へ。との聲々、されど現在の主を打たれて首を縮むる腰拔ども、息を殺して空屋の如し。又一半は室内に入りて、間毎々に燃残る蠟燭を吹消し、爐火鉢に悉く水を注ぎ入れ、若しや後に味方の取落せし見苦しき品やあると一々見廻りぬ。

明行く空に響き渡る銅鑼の音、一黨何れも溢るゝばかりの笑顔に駈集り、人數を改め姓名を呼上げし後、豫ての退口、整々として裏門より立出づれば、旭日東天に昇りて、満目の雪紅に匂ひぬ。(四十七止)



一三 冬休日記

十二月二十五日。晴。今日より
 休暇となりて、身體伸びくす。冬
 の日影ほかくと暖に、山茶花の花
 二三輪障子に映れり。昨日までの
 學校の忙しさを思へば實に夢の如
 し。仕事師門松を立つ。門に出て
 て見る。例年のよりも大なり。隣
 家山田君の宅は忌中なれば立てず。
 家に入らんとする時、郵便脚夫クリ
 スマスの美しきカードを齎す。永
 井君よりの贈物なり。直ちに豫て
 求め置きしカードを答禮として贈

臥床
れどこにつく

目まぐるし
目ざほりにな
つて煩はしい

る。夕、同君を訪ひて、クリスマス式の式に列る。飾られたる常磐樹
に映る燈影、明るく神々しく。樂の音、讚美歌の聲、莊嚴の氣、和樂の象
こもく、君が家に滿つ。更けて出づ。星多き夜なり。

二十六日。曇。終日父上の年賀狀の表書す。五百枚書上げし
は夜の九時頃なり。鉛筆とペンのみ持てる手の、久々にて筆を執
りし故にや、肩張りて堪へ難し。入浴して臥床す。

二十七日。晴。田中君來る。夕飯を共にす。

夜、同君と共に出て、雜誌屋の店頭立つ。各種雜誌の新年號、
とりとりの新粧目まぐるしきばかりなり。妹のために「少女世界」
を求む。

二十八日。二十九日。晴。無事。

三十日。晴。午前、永井君よりかるたの練習に招かれたれど行
かず。午後、妹の友垣五、六人打連れ來り、庭上にて羽子突交す。

三十一日。曇。友人への賀狀に、十枚ばかり犬を畫く。妹傍よ
り見て、皆猫のやうです。ね」と言ふ。「お前にも何か畫いて上げよう
か。」と言へば、笑つて頭を振る。

一月一日。雨。後晴。朝起きしばかりの所に、田中君盛裝して
來る。予が寢惚顔を見て曰く、「去年とやいはん今年とやいはん」と。
君は級中第一の歌人として推稱せらるゝ人。上らずして去る。

午後、新聞の初刷來る。犬の繪に是はといふ物なし。予の例の
猫犬も全然棄つべきにあらずと思ふ。父上へは年賀狀百通ばか
り來りたれど、予には一枚も來らず。

夜、寶船々々と賣歩く聲す。

二日。晴。後曇。來れりく、一時に六枚。しかも繪葉書ばか
りなり。藤堂君の愛犬を寫生せしもの最も見るに足る。尋いで
英文の賀狀來る。差出人の名を逸せり。新年早々そゝつかしき

去年云々
年の内に春は
來にけりひと
とせを去年と
やいはん今年
とやいはん
(在原元方、古
今集)

推稱
おしあげてほ
める

逸す
おとす

ことかな。父上の追加の賀状百枚ばかり表書す。
夜隣の家よりかるた會に招かる。母上、妹と行かる。夜更くる
まで賑かなる聲止まず。

三日。四日。五日。晴。風邪の氣味なれば、引籠りて新年の雜
誌を讀む。

六日。晴。朝、近藤中村の二君來る。連立ちて今井先生を訪ふ。
先生歡んで迎へられ、休暇中何か面白いことがあつたかね。と問は
る。予先づ「何もありませんでした。」と答へけるに、「君等の年配の時
分は正月が面白いものだが。」と言はる。それより、「こんな歌を詠ん
だ。」と示さるゝを見れば、勅題「曉山雲」を詠ぜられたるなり。夫人の
御手料理を戴き、夕刻辭して歸る。

七日。晴。休暇も今日限りなり。何となく心淋し。夕門毎の
松取除かる。風寒し。(日記文範)

年配
としころ

一四 試作

寒 雨

私は毎日々々學校に汽車で通つてゐますが、通學するの
には、冬の雨ほど厭なものはありません。

立田口で下車すると、何時も、今時分雪ではないかと思は
れるやうな寒い雨が降ります。雪ならば雪のやうに白い
塊がひらくと降り、雨なら雨のやうにどしやぶりに降れ
ばよいのに、男らしくもない小さい雨がしよばくと降る
のが、第一私の氣に入りません。眞白に雪が積つて居れば、
學校まで走つてでも行きますし、雨なら雨のやうにどしや
ぶりに降れば、それ相當の仕度をして出るから、却つて私は

立田口
宮地線の小驛

其の方が好きです。汽車の中では少しも分らないが、下車して見ると、寒い雨が降るとも知れずに降つて、屹度風を伴つてゐます。マントを着て傘をさして行くと、無用な風が横からマントを吹捲り傘を吹上げるので、餘儀なく雨に濡れなければなりません。

朝、雪かと思つて出て來ると、歸りには雨となつて落ちかかり、其の上に寒風が吹付けるので、眼鏡は曇り、着物は濡れます。ランニングの練習にはなるかも知れませんが、有難いとは思はれません。停車場へ來て見ると、ストローヴはあつても、火が入れてないので、濡れた儘で震へてゐます。

正面の畠には農夫がしよんぼりと立つてゐます。農夫

も此の寒雨は嫌に違ありません。空はどんよりとして、山は影を隠し、世界が狭くなつたやうに思はれます。雪なら目覺しいのですが、寒雨は誠に陰氣な感じを起させます。一寸明るくなつたかと思ふ間もなく、何處からか雲がやつて來て、又ざあつと降出します。偶、霰がこつくと屋根を打つて居るかと思ふと、頓て又雨に代ります。斯うして降續けて居る中に、世界は次第に薄暗くなり、此の寒雨の中に今年も暮れて行くやうな氣がします。(清藤生)

二 橋の霜

今朝も眞白な橋の霜

誰が最初に渡るだらう

チリ、、、、、

コースター付の自轉車が

矢よりも早く飛んでつた

後から爺さん頬被り

壊れかゝつた荷車に

大根積んで「おゝ寒むや」

三 ペンの音

寒さうな小兒の泣聲が止んで、冬の夜はまた元の寂寞に返つた。庭の松の枝にも風の音は絶えた。と、隣室から誰かの運ぶペンの音が微に洩れて来る。續いては切れ、切れては續いて、何事かを訴へるやうにも聞え、又恨を語るやうにも聞える。私の机の上には、金文字入の教科書が淡い電燈の光に冷たく輝いて居る。ペンの音に耳を傾けながら、じつと其の金文字の輝を見詰めて居ると、それが夢のやうに、又幻のやうに、自分を引付けて行く。音の流は絶えなく響く。あゝ、冬の夜のペンの音、何といふ寂しい響だらう。火鉢の炭火には、白い灰がふはくゝ動いて居る。故郷の冬の有様が身を顫はせるやうに頭の中に浮んで來た。雞

に啄かれた霜除けの中の石竹、葉の落ちた柿の木の枝、それらの荒果てた庭を眺めて居る白髪の父。種々の思出は冬の小川のやうに淋しい咽をなして流れて出る。爪先からぞく／＼と冷たさを感じて、更行くまゝに冬の氣が膚に迫るのを覚える。

ペンの音はまだ止まうともしない。(楠本生)

中村秋香

静岡縣の人、歌人、宮内省御歌所寄人、明治四十三年歿、年七十
白河樂翁
松平定信、磐城國白河の城

一五 歌話

中村秋香

一 とりゐ坂

白河樂翁公、年十二にてなほ田安の邸におはせし頃、麻布鳥居坂なる戸川内膳の邸宅より火起り、其の邊の町家類焼

主、老中、文政十二年(西曆一八三〇)歿、年七十二
田安
徳川宗武、吉宗の子、家重の弟、定信の實父

しけり。大火といふまでにもあらざりしかど、焼死せしもの多かりしかば、

この火事は人の命をとりゐ坂

これより上のとがはないぜん



白河樂翁

と落首せる者ありけり。近侍の人々興じ笑ひて、如何にもよく詠みたり。」と評し合ひけるを、君聞き給ひて、余が詠まんには、さは言はじ。」とありければ、奥醫師の某「さらば何とか詠ませ給ふ。」と問ひ参らするに、「言はじ、言はじ。」とすまひ

給ふを、強ひて問ひ參らせたりしかば、四の句を「怪我のことなり。」といふべきなり。」とあり。一句のことにて一首の意味を全く顛倒せしめ、過の己み難きに出づるを明かにせられしこと、誠に「梅檀の二葉」とぞいふべき。

二 あがたの宿

延享某の年の秋、江戸大風雨にて、市中處々の人家破損しけるあけの日、賀茂眞淵翁の許へ、門人それがし見舞に行きけるに、翁の家も夜來の風にて屋根大方吹きまくられ、日光席にさし入り、屋根板狼藉たる中に、翁は平常の如く机に倚りて沈思吟詠せり。「烈しき風雨にも候ひしかな。」といふ聲を聞き、始めてそれがしの來れるを知りけん、顧みて會釋し

賀茂眞淵
岡部氏、縣居
と號する、江
戸の國學者、
明和六年(一四
三)歿、年七十
三

つゝ、餘談に及ばず、此の嵐にて一首出で來ぬ。」とて、書きて示しける歌、

野分してあがたの宿は荒れにけり

月見に來よと誰にいはまし

もろこしの
人に見せば
やみよしの
のよし野の
山のはなの
さかりを
賀茂眞淵

かきまき

賀茂眞淵筆蹟

小澤蘆庵

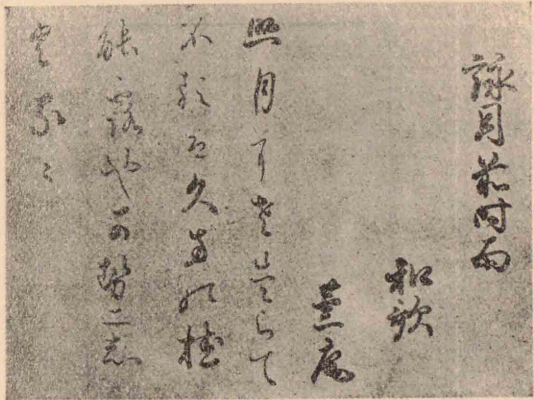
京都の歌人、
享和元年(一四
九)歿、年七十

三 燒野の原

天明の火災にて、小澤蘆庵が家危くなりし時、翁、人々に告

太秦
山城國、京都
の西

詠月前時雨
和歌
照月にさば
らてふるは
久方の桂の
露やせに
しぐる



小 澤 庵 井 顯

げて、他の品は皆焼きても苦しから
ず、只書籍だけは一冊も多く出し給
はれ。とて、自身も年來の鈔録本を風
呂敷包にし、之を負ひて、太秦なるし
るべの家に避けぬ。此の火にて内
裏の炎上せし由を聞き、いたく歎き
て、翌日未明に太秦を出で、内裏の焼
跡を拜し奉りて、

けさ見れば焼野の原となりけり

これやきのふの玉しきの庭 (新説歌がたり)

橘曙覽
井手氏、福井
の歌人、明治
元年歿、年五
十七

一六 たのしみは

橘 曙 覽

たのしみは珍しきふみ人に借り

はじめ一ひらひろげたる時

たのしみは妻子睦じく打集ひ

かしらならべて物を食ふ時

たのしみは朝起出でて昨日まで

なかりし花の咲ける見る時

たのしみは心にかなふ山水の

あたり静に見てありく時

たのしみは常に見馴れぬ鳥の來て

軒さほからぬ樹に鳴きし時

たのしみは物識人に稀にあひて
 いにしへいまを語り合ふ時
 たのしみは稀に魚煮て子等皆が
 うまし／＼こいひて食ふ時
 たのしみは坐ろ讀行く書の中に
 われごひごしき人を見し時
 たのしみは家内五人いつたりが
 風だに引かでありあへる時
 たのしみは三人の子供すく／＼こ
 おほきくなれる姿見る時
 たのしみは人も訪ひ來ず事もなく

鈴屋 本居宣長、伊勢國の人、徳川中世の國學者、享和元年歿、年七十二

嘉納治五郎 兵庫縣の人、萬延元年生、前東京高等師範學校校長、貴族院議員

ギッボン Gibbon 英國の歴史家(1776-1835)

天を蓋ふ雲をこゝろを入れて書を見る時
 たのしみは小豆の飯の冷えたるを
 茶漬てふ物になして食ふ時
 たのしみは神の御國の民として
 神のをしへを深くおもふ時
 たのしみは鈴屋大人の後に生れ
 そのみさこしを受くる思ふ時 (橘曙覧全集)

一七 自修

嘉納治五郎

自修の必要なことは昔も今も同じである。「ローマ盛衰史」の著者ギッポンは、修養に關して一の的確な教訓を遺し

て居る。それは、何人も二つの教育を要する。一つは他から受けるもので、一つは自ら與へるものである。さうして、後者は前者よりも一層緊要である。といふのである。實に古來學問の道に入つた者は、其の學問に就いて他人から教を受けると同時に、己も亦矻々として自ら修め、そして其の到達點の最高最遠であることを期したのであつた。蓋し他から注入されたものは我が有となることが割合に少いが、自ら修め自ら努力して得たものは自己の所有となり、眞正に精神の榮養となるからである。禪家の語に、門より入るものは是家珍にあらず、須らく自己の胸底より流出して、天を蓋ひ地を掩ふべし。とあるのは面白い。



嘉納治五郎

自修は印象を明確にし、知識を能力に變ずる最良の方法である。これが卑近の例を擧げると、數學を學ぶに當つて、毎日自分で練習せず、豫め考量もせず、單に先生の説明ばかりを聽いて居るとしたならば、其の結果はどうであらう。其の説明を聽いた部分だけは分つたにしても、いざ應用問題を解かうとする場合には、手も足も出ないであらう。外國語を習ふに際しても亦同様である。自分で字書も引かず、又自分で文を作るなどのこともせず、單に教室内の講義や指示ばかりに頼つて居るとしたならば、其の

成己益世
是志士之本
領
進乎齋

成己益世 是志士之本領

進乎齋

嘉納治五郎筆讀

講義され指示された事項だけは假に記憶することが出来るにしても、教科書以外の書物を読みこなす力は養ひ難い。其の他、地理・歴史・物理・博物、又は有らゆる専門學科の學習に於ても同じことである。若し此等の學科の授業を受ける前と後とに、自分で前後の連絡や因果の關係や事實の輕重などを考へなければ、新に學得した知識は、既に得て居る知識と連鎖することが出来ないから、頭腦の裡に於て全く孤立し、記憶も鞏固にならない。斯ういふ譯であるから、經

験によつて自修の價值を知悉した者は、常に自修を以て殆ど己の生命のやうに考へて、たとひ寸陰でも之を徒費しないで、直ちに自修に宛てるのである。茲に自修とは、かの豫習・復習の兩者を自己の全力を緊張して仕遂げることといふのである。従つて自修が各學科を通じて必要なことは言ふまでもない。かの數學に解式書を用ひたり、語學に獨案内を用ひたりするなど、總べて他に依頼するのは自修の本旨を没却するもので、自修の名はあつても效力は甚だ薄く、其の實は依頼心の變形といふべきものである。自修の効果は啻に學校に於て授けられる學科の習得に對して補助となるばかりでなく、それが鞏固な意志によつ

フランクリン

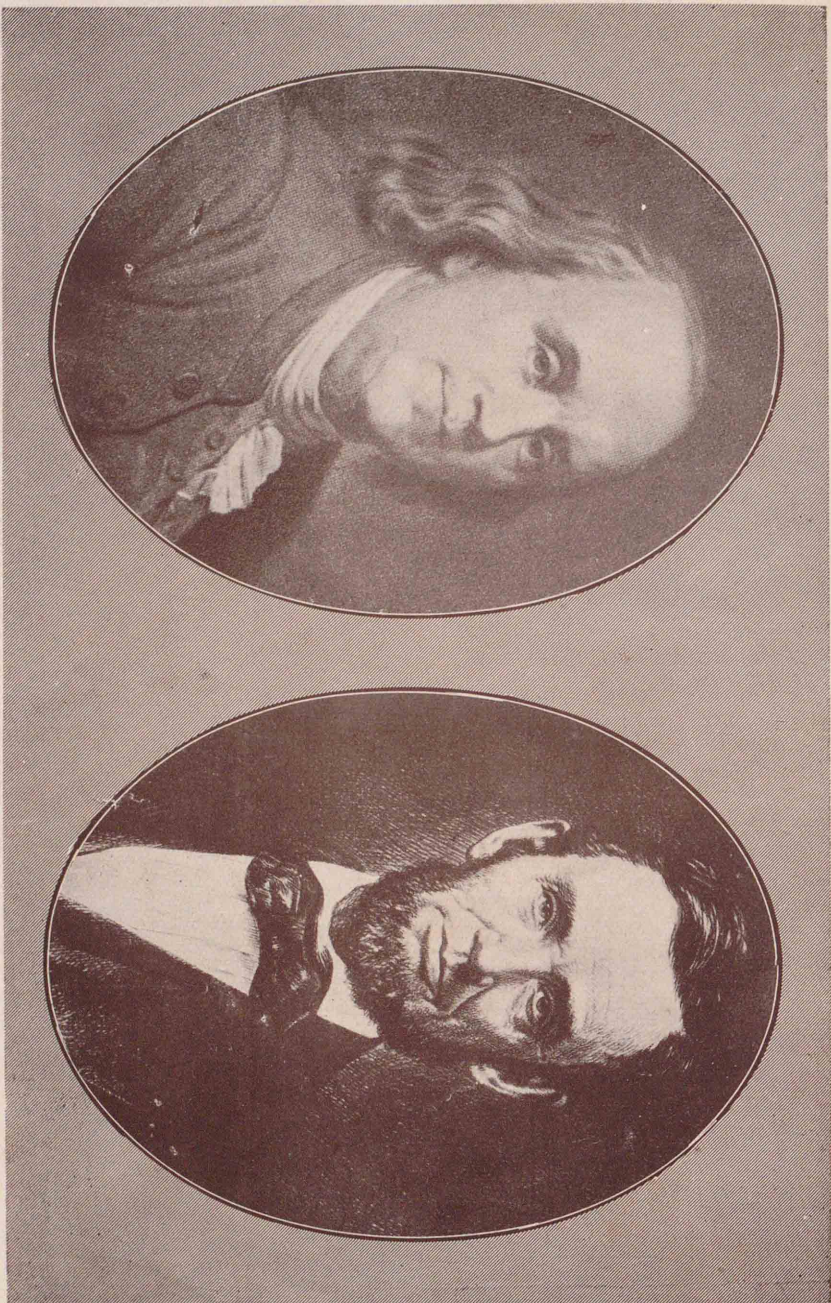
Franklin. 米
國の政治家
學者 (1706-17
90)

リンカーン
Lincoln. 米國
合衆國第十六
代の大統領 (1
809-1865)
二宮尊徳
名は金次郎、
相模國の人、
徳川末期の經
濟家・學者
新井白石
名は君美、江
戸の人 徳川
中世の政治
家・學者



家たれ生のン-カンリ

て持續して行はれれば、十分に學校に於ける學習の代用を
もすることが出来るものである。かの米國獨立史上に不
朽の名を留めて居るフランクリンの幼
時の教育はどうであつたか。彼は僅々
二年ほどの學校教育を受けたばかりで
ある。又米國に於て殘忍暴戾な奴隸制
度の廢止に盡力して、長へに人道の上
光を添へたりんカーンは、僅に一年足ら
ずの學校教育の外は受けなかつたので
ある。又今日まで徳行の光の輝いて居る二宮尊徳や、碩學
一世に秀でてゐた新井白石なども、殆ど他人から何等の教



フランクリン

リンカーン

育も受けず、少壯時代に於て専ら自修の功を積んであのやうになつたのである。蘭學が始めて我が國に傳來した頃は、我が國の學者は始から一字々々字引を引いて見、想像に想像、熟考に熟考を重ねて、漸く大體の意味を察知したといふことである。更に手近く余が實際目撃した事實にもさういふことがある。先年、余の家に十七八歳の青年が來て寄寓することになつた。この青年の小さい頃には、まだ義務教育も十分に勵行されてゐなかつたので、僅に假名を讀み得るだけの學力しかなかつたが、余の家に寄寓してから、奮然として一通りの學力を得ようと心掛け、余が與へた假名付の書物で漢字を覚え、一心不亂に熟讀を重ねて、到頭相

當多數の漢字を習得し、斯くて新聞紙などはすらくくと讀み、日常の手紙の往復にも何等の差支を感じないやうになつたので、本人の満足は言ふに及ばず、余も世話甲斐のあつたことを甚だ喜んだのであつた。

自修の効力は此のやうに甚大であるけれども、又不利益が伴はないでもない。總じて自修だけで一通り學藝に熟達しようとするには、極めて多くの時間と努力とを要し、而も見聞は自ら狹隘になることを免れないのである。この點から言ふと、他人に就いて學ぶことは多くの利益がある。即ち僅少の時間に僅少の勞力で多くの事項を容易く習得することが出来るから、吾人は自修を怠らないと同時に、學

校に於ける學習を輕視してはならぬ。(青年修養訓)

一八 發明家エヂソン

此處はグラントトランク鐵道の終點である。汽車は轟然として停車場の構内に入つて來た。驛夫は強い聲を絞つて、「ヒューロン、ヒューロン。」と呼立てる。「サンドキッチ、サンドキッチ。」煙草にマッチ、煙草にマッチ。」様々の賣聲が雜然として騒がしく聞える。その澤山の賣子の中に、賣残りの新聞紙を抱へて居る少年がある。顔の丸い、眼のぱつちりとした、見るから氣持のよい少年である。この時少年は漸く十一歳、健氣にも家計の幾分を助けるため、列車内の新聞賣子となつて居るのだつた。この少年こそは實に後の大發明家トマスエヂソンだつた。

ヒューロン
アメリカ合衆
國ミシガン州
ヒューロン湖
畔にある都會

健氣
男々しい
エヂソン
Thomas Edison
(1847-)

即座
その場ですぐ

愚鈍
おろかにぶ
い

計畫
もくろみ
大規模
おほじかけ

エヂソンは小學校では極めて成績が悪く、それに腕白だったの
で、教師は其の母に退學を勧めた。負けぬ氣の母は即座に彼を退
學させて、自ら之を教育した。彼は僅に九歳に過ぎなかつたけれ
ども、母の熱誠によつて次第に讀書に興味を覺えるやうになり、斯
うして將來見込のない愚鈍兒と見做された彼の頭腦も啓發され
始めたのだつた。

彼が新聞賣子となつた頃、恰も好し、米國は南北戦争の最中だつ
たので、戦況を知らうとする人々は争うて新聞を買つた。彼が毎
朝抱へて行く大東の新聞紙は殆ど賣切れる程だつた。そこで、彼
は、唯單に賣子をするだけでは面白くない、寧ろ自分で新聞紙を作
つて賣つて見たいと考へて、新聞紙發行の計畫を立てた。年齢僅
に十五歳の少年に、固より大規模のものの出來よう筈はないが、種
種苦心して、機械、活字その他の道具を整へ、之を列車内の一隅に備

へ付けて、其處を編輯室とも發行所ともした。

新聞紙の名は「グランド・トランク週報」といひ、毎土曜日の發行だ
つた。幸ひ此の少年記者の新聞は好評を博し、乗客は興味を以て
これを購讀した。彼は此の仕事をしながらも、一方母によつて啓
發された勉學を止めなかつた。その編輯所には、電氣に關する書
籍や實驗用の器械を備へ付け、營業の傍常に研究を怠らなかつた。
この堅忍不拔の精神が將來彼をして一千餘種の發明を爲さしめ
たのだつた。

動搖
動きゆれるこ
と
矢庭
立ちどころに

所が、意外な打撃が彼の上に落ちて來た。或日、列車内で化學の
實驗をしてゐた所、列車の動搖によつて、棚の上に置いてあつた燐
素の壘が下に落ちたので、そこらは一面の火となつた。彼は驚い
て飛上り、上衣を脱いで消止めようとしたが、到頭車掌に見付かつ
た。車掌は怒るまいことか、矢庭に、此の野郎、途方もないことをし

椿事
意外の出来事
厄
災難

をる。」と、拳を固めて擲りつけ、機械や活字を手當り次第に投棄した。あはれ、此の椿事の爲に、彼は一耳を傷ひ、週報社は全滅の厄に遇つた。けれども彼は屈しなかつた。再び機械を集め、自宅で新聞紙の發行を續け、又化學の實驗をも繼續した。彼は失敗の爲に挫折するやうな心弱い少年ではなかつた。或日、彼は例の通り新聞を賣る爲に列車に乗つた。そして、クレメンス驛に着いた。折しも「危い、危い」と叫ぶけた、ましいい聲がする。何事かと驚いて見廻すと、線路の間に小さい子供が遊んで居る。そして、汽車は今疾風のやうに駛つて來て居る。彼は忽ち身を躍らして其の危地に飛入り、難なく子供を救ひ上げて、其の父に引渡した。其の父は涙と共に彼の手を握つて其の親切を謝した。其の人は電信技師だつた。この縁故によつて、彼は此の技師に就いて電信の技術を習ひ、遂

素質
本來もつてゐる性質

餘裕
あまり



にヒューロン停車場の電信技手に採用され、二十五弗の俸給を受けることになつた。この時僅に十六歳だつた。併し、彼は模範的の技手ではなかつた。彼は當時既に發明家たるべき素質を現し、機械的に働くよりも、寧ろ機械を案出しようとする傾向を有つてゐたので、事務家としては優秀でなかつた。その後他に轉任したが、常に品行方正、純潔な青年として成長し、得る所の俸給に餘裕があれば、それで書籍を購うて益々研究に努めた。後ボストンのウエスタウンユニオン會社の技手となり、二十一歳まで留まつたが、其の間、電信の速記法を考案し、送信自動器を發明し、國會議

囊中

財布の中

彷徨

さまよふ

善後策

あと始末をよくする方法

抱負

かんがへ

剽切

最も適切なこと

招聘

禮を厚くして招く呼ぶ

事堂などで使用すべき贅否表示器を發明した。彼は更にニューヨークに行つたが、此の時、囊中一錢の蓄もなく、一人の知己もない巷に饑と寒さに苦しみながら、職業を求めて彷徨した。たま／＼某會社が窮境に陥つて工場を閉鎖し、其の善後策を講じてゐたので、幾多の職工は手を空しうして、善い解決のつくのを待つてゐた。之を聞いたエヂソンは、こゝぞ自分の抱負を實現すべき好機會と思ひ、破れ服を纏つたまゝ、大膽にも重役に面會を申込んだ。重役は此の穢らしい青年を見て殆ど狂人視した。けれども、遂に彼の熱心に動かされ、試に彼を其の難事に當らせることとなつた。所が、彼の爲す所は極めて剽切で、快刀で亂麻を斷つやうに巧妙に處理したので、忽ち會社を悲境から救ひ出すことが出來た。會社は彼を月俸三百弗で技師に招聘した。これ彼が名を爲す第一の階段だつた。

完成
一完全に仕上げ
る

昨日は饑寒に苦しんだ一青年、今日は立派な紳士になつた。是に於て彼は再び發明に心を用ひ、先づ新式の印刷機を發明して、米國の印刷界に大なる貢獻をした。是がため彼は八萬圓の報酬を得たのだつた。次に、彼は同一の電線によつて、同時に二重に、更に四重に通信することの出来る電信法を發明し、更に進んで八重通信法をも發明した。此等は電信に要する銅線や勞力や通信時間等の經濟上非常に大切な貢獻だつた。所で、更に彼をして一層大ならしめたものは電話機の完成である。是は從來とても發明されてはゐたけれども、實用上不完全なものだつた。然るに、今日のやうに自由に通信することの出来る機械を案出した者は實に彼だつた。

かやうに發明心に満ちて居る彼は、更に電燈の發明をも企てた。當時電氣によつて點火する術が知られてはゐたが、まだ今日使用

織維
すぢ

惹起
ひきおこす

周到
行届くこと

するやうな電燈はなかつた。それは電球の製作が發明されておなかつたからである。そこで、エヂソンは其の發明に苦心し、そして、其の材料には日本の扇子の竹の織維が最も適良であることを發見した。彼は此の研究のため、四晝夜の間殆ど寢食を忘れて試験室を出なかつた。その熱心は到底凡人の及ぶ所でない。そして、此の發明は一八八〇年特許權を得たが、是に由つて世界の燈火は一大革命を惹起した。これ實に彼が三十三歳の時だつた。次に彼が發明したのは蓄音器であるが、此は殆ど偶然の發明だつた。つまり電話機の振動によつて思ひついたのだつた。如何に偶然だとはいへ、畢竟不斷の周到な注意が斯かる些事によつて大發明をなすに至らせたものである。かやうに彼が注意と熱心とによつて發明したものは屈指に違がなく、その數は既に一千餘種に上つて居る。あの活動寫眞なども亦其の一つである。

流浪
あさまふ

早熟
早くまぜる

竹越與三郎
號は三又、
湯縣の人、
應元年生、
室編修官長

彼は幼にして愚鈍視せられ、貧窮の中に人となり、東西に流浪したにも係らず、遂に大なる功を成した。これ蓋し終始一貫努力の二字に生きたからである。彼は自ら予は十五年間毎日平均二十時間づつ仕事をした。と言ひ、又予は蓄音器を除くの外は一も偶然に發明したものは無い。と言つた。之を以て見ても、彼が如何に努力の人であるかを知ることが出来る。幼年時代の遅鈍必ずしも失望すべきでない。たとひ牛の歩みは遅くとも、遂には千里の道を行くではないか。早熟の子供だけを怜悧だと思ふのは間違である。〔近世偉人物語に據る〕

一九 功名心

竹越與三郎

功名心は虚榮心ではない。虚榮心は心の卑しい婦人の

有つものである。心の卑しい婦人は、左右の手に五六箇の指環を嵌め、其の燦然たる光によつて同輩に誇り、或は流行の衣服を着て以て傍人に誇らうとするが、若し此の指環を注視する者がなく、此の衣服を望見する者がなければ、其の心に淋しさを感じるものである。斯様に虚榮心は他を埃つて己を慰めるものである。

功名心はさうでなく、大きな人格から湧出る一の波動で、恰も大きな鐘が大きな音を出すのと同じである。功名心は己自らに對して満足を得なければ止まないものである。他人は攻撃してもよい、嗤つてもよい、又褒めてもよい。自分では自分で自分の爲さうと思ふ所を爲さねばならないの

ナポレオン
Napoleon,
フランス皇帝
(1769-1821)

桓温
字は子元、東
晉の人



ンオレボナ

が功名心である。ナポレオンが之を註釋して、「功名心は豪傑の欲情にして、これあるものは、或は大善をなし、或は大悪をなす。唯其の主義の善悪如何を問ふべきのみ。」と言つた

のは、流石に功名兒だけあつて、能く其の消息を言盡したものと謂つてよい。晉の桓温は、男子芳を百世に流すこと能はずんば、當に臭を萬世に遺すべし。と言つた。固よ

り臭は人の希ふべき所でないから、唯言語の文として斯う言つたのに過ぎないが、最も能く功名兒の好大心を表明し

クロンウェル
Cromwell, 英
國の政治家
(1599-1658)

て居る。クロンウェルは大統領の位に即いた時、ロンドン市民が雲霞の如く集つて其の行列を眺めるのを見て、冷然として笑つて、我が頸若し斷頭臺に登らば、此の群集は更に



多く集るべし。」と言つた。功名心の虚榮心でないことは、即ち是に由つても知ることが出来るよう。

功名心は必ずしも成功するとは限らない。時には成功することもあるが、又時には失敗することもある。併し、成功するにせよ失敗するにせよ、とにかく功名心のあるものは幸福である。と云ふのは、功

名心その物の中に幸福があるからである。功名心のある者は、眼前英雄と相對するが如く、常に其の心は倦まないのである。自分は此の英雄の爲した所を爲さなければならぬ、自分は此の英雄の爲した事業よりも更に大きな事業を爲さねばならないといふ心を有つて居るから、春が去らず、少年の心が失せず、老が來ず、常に若々しい心を有つて居ることが出来るのである。

人生に於て希望ほど重要なものはない。たゞ一の希望があれば、大洋に於て呑天の波濤に圍まれた難波船の中にあつても、水夫は尙其の努力を廢しないのである。たゞ一の希望があれば、醫師が其の術の盡きたのを自白しながら

も、尙病人の血脈の動く間は方法を試みようとするのである。たゞ一の希望があれば、僧侶が最後の祈禱を捧げる時に於ても、囚人は尙其の生を期するのである。こゝに希望があればこゝに生命がある。一分間の希望があれば一分間の生命がある。功名心は人をして無限の希望を懐かせるものである。無限の希望を懐く者は無限の青春を有するものである。思ふに、希望といひ功名心といふが如きは、曠達な哲人から見ると或は夢だと言ふかも知れない。併しながら、達人から達觀すると、人生何物か泡沫夢幻でないものがあらう。若し夢だとすれば、我等は成るべく美しく成るべく永い夢を見ることを希ふべきである。(惜春雜話)

二〇 最後の授業

菊池 幽芳

菊池幽芳
名は清、水戸
市の人、明治
三年生、大阪
毎日新聞社員

いつもの通り僕は學校へ出掛けて往つた。今朝は、天氣はぼか／＼暖いし、其の上、空はからりと晴れて居る。森のはたでは、お喋舌しゃべりの黒鳥が囀り、牧場では、木挽小屋の後の方で、プロシヤ兵が訓練をやつて居る。



村役場の前を通りかゝると、小さな鐵柵のある揭示場の

前に、大勢の人がたかつてゐた。二年此の方、ありとある不吉の報知や、負けた戦報や、徴發のことや、プロシヤの方の色色の命令など、そんな厭なものかみんな此處から來たのだ。又何かあるんだなと考へながら、足も止めず、アメル先生の小さな校庭へはいつて行つた。

開いて居る窓から見ると、僕の仲間はもうみんな銘々の腰掛に並んでゐて、先生は恐しい鐵の定木を抱へ込みながら、其の前を往つたり來たりして居る。僕はそつとはいつて、僕の机の前に坐つた。

僕は、先生が青色の上等のフロックを着て、綺麗に襟の處で襷を取つた笹縁のシャツを着け、參觀日か賞品授與式の

時でなければ冠ることのない縁取の黒帽を冠つて居るのに氣が付いた。そればかりか、教場には何か非常の事でもありさうで、嚴かな空氣が満ち渡つてゐた。

併し、一番僕の驚いたのは、教場の奥の方の何時も空虚な机の前に、村の人が僕等と同じく黙つて坐つて居ることであつた。其の人達の中には、三角帽を冠つたオーゼー爺さん、前の村長さん、前の競賣吏員さんなどがゐた。そして、此の人達はみんな悲しさうな顔をして居るのだ。オーゼー爺さんは、縁の蝕んだ古いABCの讀本を持つて來て、それを膝の上に載せ、大きな眼鏡を開いた頁の上に置いてゐた。僕が驚いて居る間に、先生は講座に上つた。そして、優し

エルザス・ロ
ートリンゲ
ン
佛國の領地であつたが、西
曆一八七〇年
普佛戦争の結果
ドイツ領となつた

い、而も厳格な聲で僕等に言つた。「わしの子供達。是がお前達にわしの教へる最後の授業だ。ベルリンから命令が来て、『エルザスとロートリンゲンの小學校では、ドイツ語の外は教へられぬ。』と言つて來たのだ。新しいドイツの先生が明日着くことになつて居る。今日はフランス語の教へじまひだから、わしはお前達に一所懸命に聞いて貰はなければならぬ。」此の僅かばかりの言葉が僕をあつと動轉させて了つた。あゝ何といふみじめなことだ。村役場の揭示は其のことだつたのだ。

僕のフランス語の學びじまひ。其の僕はまだろくろく書くことさへも出來ないのだ。もう僕は習ふことも出來

ないと思ふと、學校を休んで、禽の巢を探し廻つたり、河で氷滑をしたりして、無駄に費した時間が今更怨めしくなつた。つい今の先まで重がつて荷厄介にした教科書、文典や宗教の本も、今となつては別れの辛い舊友のやうな氣がする。

先生が取つておきの着物を着て來たのも、此の最後の授業に敬意を表する爲だつた。村の老人達の様子も、今まで此の學校へ度々來なかつたことを悔むやうに見えた。此の人達の來たのは、四十年も此の小學校にゐて、立派に職務を盡してくれた僕等の先生に感謝の意を表する爲でもあつたし、又失はれた祖國に對する義務を盡す爲でもあつたらしく想はれた。

僕がこんなことを考へて居る時、僕の名を呼ばれたのに気が付いた。僕の諳誦する番が來たのだ。僕は早速第一の言葉にまごついて了つた。胸が一杯に込上げて來て、顔を擧げることにも出來ず、腰掛から立つたまゝ身體の權衡を取つて居ると、先生の言ふ聲が聞えた。「フランチ坊や。わしは今日はお前を罰しはせぬ。併し、お前は罰せられるのが當然だ。お前などは毎日おきまりに言つてゐたことだ。『いつでも時間はあるのだ、明日勉強すればよい。』と。どうだな、今日といふ今日、其の結果がお前に分つたらう。全體エルザス人の教育を、いつも其の通りに明日に延してゐたのが、エルザス州の何よりの不幸だつたのだ。今になると、敵

國の奴等は言ふだらう、『何だ、貴様達はそれでもフランス人だと言ふのか。フランス語が書けも讀めもしない癖に。』と。それに何と返事が出来る。」

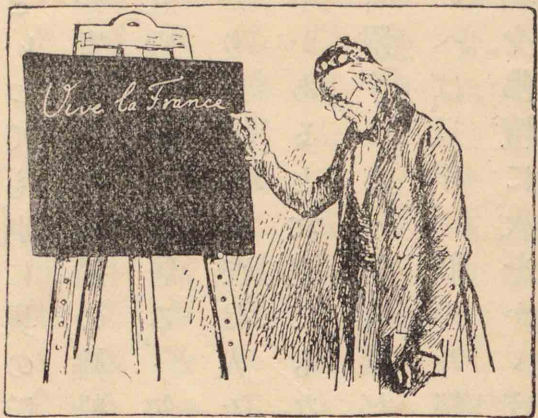
先生の言葉はそれからそれへと盡きなかつた。先生は、「フランス語は我々の先祖から持ち傳へた大事な詞だから、我々は此の詞を能く護つて、決して忘れてはならない。假令一國民が奴隸の境遇に落ちようとも、其の國の詞を護つて居る間は、丁度牢屋の鍵を持つて居るやうなものだ。」と説いた。

そして、先生は文典を取つて僕等に讀んで聞かせた。僕は自分で能くそれが分つて行くのに驚いた。先生の説明

が實に能く僕の頭にはいつて行くのだ。僕はこんなに能く先生の言ふことを聞いてゐたこともなければ、先生もこんな辛抱して説明したこともなかつたであらう。此の氣の毒な先生は、此處を立去るに就いて、自分の知つて居るだけのことを一度にみんな僕等の頭に詰込んで行かうとするやうに思はれた。

其の課目が終ると、今度は習字の稽古に移つた。先生は特別に僕等に渡してくれる爲に、新しいお手本を用意して來た。其の御手本には、美しい丸い字で、「ヴァイヴ、ラ、フランス。」と書かれてあつた。銘々がどんなに一所懸命に字を習つたか見せたいやうだつた。一番年の行かぬ生徒達さへ、

ヴァイヴ、ラ、
フランス
フランス萬歳



一心にちやんと覺悟して、是も亦フランス語だといふ風に、習字の線を脇目も振らず引いてゐた。

屋根の上では、鳩が低い聲で咽喉を鳴してゐたが、僕はそれを聞きながらつくづくと考へた、鳩もドイツ語で啼くやうに教へられるのか知ら。と。
(幽芳集に據る)

加能作次郎
石川縣の人、
明治十九年
生、文學者

二一 海邊の小社

加能作次郎

村の東の端の、海に面した高い崖の上のやうな處に、さゝ

やかな鎮守の宮がある。何を祀つてあるか私は知らない。何れ漁夫や船乗に縁のある神様であらう。渡會社わたらいと書いた扁額が其の廂に懸つて居る小さな祠のやうな拜殿——といつても、別に奥の院がある譯ではない——には、船乗等が寄進した、和船の難船して居る光景などを描いた繪額が五六枚懸つて居る。勿論最近までは無格社で、佛教信者ばかりの此の村では、人々はお寺のことには極めて熱心で、何かあると、女達でもなけなしの臍繰金をはたいて、争うて寄附するといふ有様だが、神事には誰も彼も冷淡で、お宮といへば、只年一回のお祭をするばかりの處のやうに見做し、朝夕佛壇に火をかゝげて念佛を唱へ、忙しい仕事を休んで

此の村
作者の郷里石
川縣羽咋郡西
海村

もお寺詣を缺かさないが、平生誰一人拜殿に額いて居る者を見たこともない。廣い境内は何時も近所の人達の穀物や鹽魚などの干場に使はれて居るけれども、社殿の修理などに進んで寄進しようといふ者は殆どなく、古い茅葺の屋根の棟が風に攪はれても、扉が破損して人が自由に潛り入られさうな大穴があいても、之を顧みる者もない有様で、徒に荒廢に委されて居るのであつた。

が、つい近年、内務省で全國の神社整理を行つた時に、もう少しで廢社になるのであつたのを、やつと規定の基本金を積んで村社に昇格し、渡會社の額の代りに、村社松が下神社と書いた新しい標木が往來脇に建てられ、社殿も修復され、

石燈籠や狛犬なども村の一二の物持によつて寄進されて、いくらか神社らしい外觀を備へるやうになつた。

併し、ずつと昔、恐らく佛教が今日ほど盛でなく、熱心な敬神家が定めて多かつたらうと思はれる時代には、今此の荒廢した、小さな、名もないお宮も、村人の敬虔な心を集めて、其の外觀もどんなに立派であつたであらうと思はれる面影が今でも残つて居る。それは、境内が割に廣くて、村で一番景勝の地を占めて居る上に、幾百年経つたらうかと思はれる老松や大榎が、近年數度の落雷の爲に三四本齒の抜けたやうに枯れ倒れたが、尙數株神社の周圍に轟々として天に聳え、日夜海風に颯々たる響を傳へて居るのや、今は所々崩

れて居るが、社殿の後に厚さ三四尺以上もあつて、恰も城塞のやうに嚴しい大石垣が築かれて居るのなどによつても、十分想像することが出来る。

殊に其の花崗岩の大鳥居は、高さ三丈にも及び、周は大人の一抱以上もあつて、此の小さな社殿には全く不調和なほど堂々たるものである。銘によると、備後の鞆津の石工の造つたもので、其の昔、神を畏れ崇める念の深かつた村の航海者達が、海上數百里の遠くから、長い月日を風浪と戦ひながら、此の北國の一漁村まで和船に積んで運び來つたものに相違ない。私は子供の時分には、此の大鳥居の側に立つ毎に、こんな大きな石の鳥居をどうして船に積むことが出

來たか、又どうして其の船が航海することが出來たか、又どうして其の船から舢舨しんぱんに移して、それから此の崖下の濱から此處まで持運んで來て此處に打建てたか、解することの出來ないもののやうな不思議な感を抱きながら見上げるのを常とした。私は、此の鳥居を積んだ和船が村の入江に着いた時、それが舢舨に移される時、海岸に揚げられる時、此處まで運ばれる時、それから最後に建てられる時の光景を、村中の人達が歡喜に充ちて、躍り上るやうな氣持で、幾日も幾日も家業を休んで、お祭騒をしてゐたであらう光景を、古い繪卷物を見るやうに、懐かしい氣持で想像するのであつた。夕暮など、遠く暮れて行く渺茫たる海を眺めながら、其

の大鳥居に凭れて立つて居ると、何となく此の鳥居が微かな海の遠鳴とも覺しい一種の物の韻いぶきを立ててゐて、恰も生きた生靈でも宿つて居るやうな感に打たれるのであつた。私は又此の鳥居を見る毎に、神殿に懸つて居る繪額の一枚を思ひ出すのが常であつた。それは小さな一隻の和船が難船して居る光景を描いたもので、古い石版刷の畫であるが、唯見る、山のやうな狂瀾怒濤の逆巻いて居る只中に、僅に一寸ばかり帆の見える居る檣頭に、金比羅權現を祈る御幣を掲げ、船體は浪に没して、恰も木の破片の浮んだやうに、僅に其の一部を現して居るなどの光景が如何にも眞に迫つてゐて、他の數枚の同じ種類のものの中に、特に擡んでた

立派な作なのである。私は何故とも知らず、鳥居を運んで来たのは此の船であるやうな気がしてならぬのであつた。備後の鞆津から穩かな瀬戸内海の航路を経て、頓て馬關海峡から日本海に出て、隱岐國のあたりで俄に難船したもののやうに思はれてならぬのであつた。同じ時同じ處を航海してゐた數多の船は皆難破して海の藻屑となつてしまつたが、此の鳥居を積んだ船だけは鎮守の神の加護によつて、漸く其の難を救はれたのではないか、といふやうな氣もされるのであつた。

私は又、鎮守の宮の祭神よりも、此の大きな石の鳥居其の物が、村の漁夫達や又は諸國の荒海を航海し廻つて居る水

夫達を守護して居るやうな氣がするのであつた。小さな舟で波の荒い沖で漁をして居る漁夫達も、小さな帆を揚げ、一枚の舵を頼りに、風に逆らはれ浪に揉まれ、して、北海の果の荒海に漂うて居る水夫達も、此の毅然として海に向つて立つて居る大鳥居を想ふ時、彼等の心は大いに安らかなものがあつたであらう、と云ふやうな感慨に打たれもするのであつた。私は此の鎮守の社の境内が好きで、今でも故郷へ歸ると、朝夕きまつたやうに、散歩がてらに其處に逍遙するのである。新しい標木や石燈籠や狛犬などがまだ如何にも生々しく、四邊の氣分とは甚しく不調和であり、殊に寄附者の名前を是見よがしに大きく彫つてあつたり

この恩なかく言葉の言盡すべきにあらねども、先づ當座の御禮までに贈り奉る。」と、涙を流して喜ぶ。馬方大いに驚



きし顔色にて、「そなたの金をそなたに取納め給ふに、何の禮ご中江と言ふことあるべき。」とて、手に藤だに取らず。

色々にこしらへ言へども、更に受けずして歸らんとする故、已むことを得ず、十兩と減じ、五兩となし、三兩となし、段々減じて終には金二歩となし、せめて此ばかりは我が心の悦なれば受け給ふべし。さなくては、我が心も濟み申さず、今宵

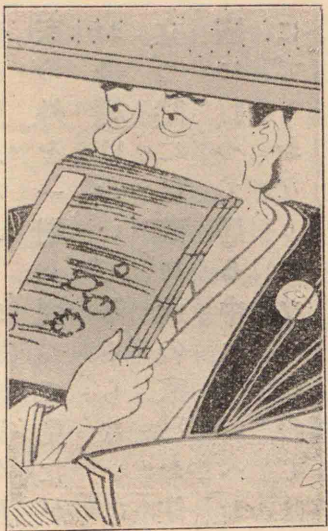
も寐ね難し。」と、理を盡し詞を盡して言ふにぞ、此の金を受け申すほどならば、二百兩をも留め置き申すべし。斯く返し申すからには、聊かにても謝禮を受くるは我が心にあらず。さりとして餘儀なく宣へば、さらば鳥目二百文を賜はるべし。此は今夜休むべき所を是まで追掛け來れる賃錢なり。此は我が取るべき錢なれば申し請くべし。」と言ひて、二百文にて酒を買ひて其の人に振舞ひ、我も酔ふほど飲みて歸らんとす。

飛脚も感に堪へ兼ね、さるにても、そこは如何なる人にておはする。」と問ふに、名ある者にあらず、又何一つ知れる者にあらず。たゞ我が在所の近所に小川村といふ處あり。此

の村に與右衛門といふ人おはして、夜毎に講釋といふことをす。某も折節行きて聞き侍りしに、親には孝を盡すべし。主人は大切にすべきものなり。人の物は取らぬものなり。無理・非道は行ふべからず。』などといふこと常に語り給ふにより、今日の金子も我が物にあらざれば、取るべき理なしと心得しまでのことなり。』と言捨てて歸りぬ。

飛脚はそれより京へ上りて、いつもの宿に到り、さても此の度は辛き命生延びて、各方にも對面することとなりぬ。』とて、ありし次第を委しく語りけり。折節、其の家の裏に、熊澤次郎八田舎より上りゐて、學問修業最中なりしが、此の物語を聞きて、其の人こそ誠の儒といふものなれ。』とて、其の翌日

江州小川村を尋ねて隨從を願はれしに、人に教へ申すべき程の學徳なし。』とて、更に隨從を許し給はず。熊澤只管に願ひて、二日が間藤樹の門に佇みて歸らず。藤樹の老母之を



熊澤 氣の毒がり、とにかくに、先づ
熊澤 内に入れ申せよ。』とありし故、
熊澤 辭み難くて内に入れ、終に師
熊澤 弟の契約をせられけりとぞ。

備前 其の後、藤樹を備前より招
き給ひしに、其の身は病身なりとて固く辭し、門人熊澤といふ者あり。御役にも立つべき者なり。』とて、熊澤を出されけり。何れも格別のことなり。〔東遊記〕

備前
こゝは岡山藩
主池田侯をさ
す

二三 雪のわかれ

四年振に故郷の小川村へ立歸つた藤太郎は、「お母様、お母様。」と言ひながら、門口に莫塵も笠も投捨てて家の内へ入つて見たが、母の姿が見えない。「お母様、只今戻りました、お母様、只今戻りました。」と家の外を一廻り廻つて見たが、更に姿も見えず答もない。さては、お母様はおいででなさらないのか、家でも違つたのか。先年大洲へ立つ時には、確に此の家にお住ひ遊ばしてゐたのに、自分が伊豫の國に行つて居る中に、餘所へお引越になつたのか、それとも御病氣にでもおなりになつたのではないのかと、子供心の胸の中は混亂して、お母様、お母様。」と頻りに呼びながら、裏口から背戸へ出て見れば、垣根の向ふに車井戸を汲上げる音がする。近寄つて見れば、母は襪を掛けて、今しも釣瓶の繩を手繰つて居るので、思はず雪の中に兩手を突いて、「お母様。」と呼ぶ。

大洲
伊豫國

誑かす
たます

井筒
井戸の地上の
まこひの木ま
たは石を圓く
構へたもの

母の芳枝は吃驚して、遠く離れた伊豫の大洲へ行つて居る藤太郎が、今此處に來る譯はない。日頃自分が藤太郎を慕ふゆゑ、狐か狸かが悴の姿に化けをつて、此の母を誑かすに相違ないと、繩を握つた兩手に力を籠めて、屹と此方を睨んだ時、また「お母様。」と呼ぶ聲がする。さては狐でも狸でもない、やはり人間、我が子の藤太郎が歸つて來たのかと母は驚き、急ぎ釣瓶を手繰上げて井筒の角に置く。溢れる水は寒風に忽ち氷柱となる。

「これ、そちは藤太郎か。」お母様、御機嫌よう。「なに、藤太郎。これ、どうしてそなたは歸つて來た。」はい、お母様が此の程お祖父様の許へお手紙を下され、其のお手紙に、併駢で御難儀を遊ばすのと、私、私は良いお薬を戴いて、之をお母様に進ぜたさに、伊豫の國から遙々歸りましてございます。「なに、此の母がお祖父様に送つた手紙の中に、併駢で難儀致すとあつたのを見て、そなたは薬を持つ

て来たといふのか。「はい。」母は心の中では、我が子の志、あら可愛やと抱上げたとは思つたが、いや待て暫し、先年國を出す時、學問を修業して、立派な人間にならない中は、必ず歸つてはならぬ。」と言聞かせてあることゆゑ、不憫ではあるが追返さねばなるまいと、辛つらい思て胸に問ひ胸に答へる。「これ藤太郎。」「はい。」「そなたが四年前お祖父様と伊豫へ行く時、此の母が何と申聞けました。『立派に成人して歸つて来れば、目出たく母子の對面もするが、若し途中で歸れば、必ず母子の縁を切る。』と言つたのを忘れましたか。」「いえ、それは忘れは致しません。お母様が胼胝で御難儀とのことに、良いお薬を差上げたいばかりにこれへ持つて参りました。」「してお祖父様が、『其のお薬を持つて歸れ。』とても仰せられて参つたのか。」「いえ、さうではございません。お手紙を拜見して、早くお癒なほし申したいと存じて参りました。」それなら、そなたは、お祖父様もお祖

山中
伊豫國朽木谷
近江國

母様も御存じない間に来たのだな。」「はい。」して、其のお薬といふのは何れから。「中田長閑齋とおつしやる方から、施しのお薬を戴いて來ました。これをお塗ぬげ遊ばせば、どんな胼胝かさでもすぐに癒ると申します。それ故、一日も早く此のお薬をお上げ申したいと、一所懸命に参りました。」此方へ参る道中の入費は。「それはお母様、何も持たずに出ましたが、山中といふ山で迷つて居る中、遠藤源左衛門といふお方様の奥様に助けられました……」「あ、有難い。『渡る世間に鬼はない。』と申す諺ことわざの通り、さて、我が子の難儀をお救ひ下さつた遠藤様御夫婦のお志。必ず其のお方様の御恩を忘れてはなりませんぞ。」「はい。」さうして、お母様、昨晩は朽木谷くもきやの峠で、雪の中で氣を失ひましたのを、御老僧様のお助を得まして……」「あの、雪の中に倒れたのを……」

母は言葉を改めて、たとへ、どんな難儀をして参らうとも、母が豫あ

ての言葉に背き、文武の道の修業も成らず、半途で歸つたそなた、すぐ大洲へ戻れば宜し、さもなければ親でもない子でもない。一人で伊豫から來られるぐらゐなら、一人で戻られぬこともあるまい。是からすぐ戻れ。此のまゝ、すぐ伊豫へ戻るかどうかや。」「すぐ是から戻ります。どうぞ家へ歸つたことはお許し下さいまし。」「許してあげる。すぐに戻れ。」「はい、戻ります。その代り折角持つて参つた此のお藥、どうぞお塗け遊ばして。」「それほど心を籠めて持つて歸つた藥、それは喜んで申受ける。」「有難う存じます。」「藤太郎は母に藥を渡して、懐かしさうに母の顔を見る。母はわざと怖い顔をして、家にはいつて、箆笥の抽斗から金を取出し、さあ、此の金をそなたに遣はすによつて、之を路用に、伊豫のお祖父様、お祖母様の許へお戻りなさい。」「いえ、お金は入りません。遠藤様から戴いたお金がまだ澤山ありますから。どうぞ此のお金で下女をお雇ひ

になつて、お母様此の寒い中だけなりといくらもお樂をして下さい。」「いや、其の志は忝いが、其のやうに母のことは心配せずとも宜い。母が藥の代として此の金を進ぜる。さあ早く――」腹の中では、今宵一夜は手許に留め、温にして休ませてやりたいとは思ふものの、さうすれば、却つて母子の情に擲まれて、戻す勇氣も戻る元氣も失せようと、きつぱり思ひ切つた母の言葉に、是非なく藤太郎はお金を戴く。」「ではお母様、御機嫌よう。修業致して立派になつて、復お目通りを願ひます。」「

痛い足をやつと踏みしめて出て行かうとすると、草鞋が曲つて、紐が解けて居る。「あゝ、これ、藤太郎、そなたの草鞋が曲つて居る。それでは直に破れる。よう直して参れ。」「はい」と草鞋の紐を結び直さうとしたが、指の先が冷えきつて、まるで湯煮た鰻のやうになつてゐて、自由に結べない。さすがの母も見兼ねて、此の母が

教育講談
故早川貞水著

やうお守り下さい。眞に切ない思を怵へて追返しました胸の中
お察しを願ひます。」と、在すが如く且告げ且頼む。
此方は藤太郎痛い足を踏みしめ、小川村から大津へ出て、そ
れから京都に入り、大阪兵庫に来て、便船を求めて大洲へ立歸りま
した時は、お祖父様お祖母様は既に方々に人を出して藤太郎を尋
ねたが、其の行方が一切分らないので、近江の國へ使者を立てよう
としてゐた所、そこへ藤太郎が無事に歸つて來たのを見て、夢かと
ばかり打喜び、仔細を聞けば、十歳の子供が近江の國まで母を尋ね
て參つたとのこと。この孝子の一念には、流石の老夫婦も感心し
て、「あゝ此の母にして此の子あり、思ひきつて離し遣はした母親の
心中、よくも再び戻つて來た藤太郎の決心、此の上は一層精を盡し
て文武の道を仕込まねばならぬ。」と語り合つた。近江聖人中江藤
樹先生幼時の逸話、これを以て終とします。（「教育講談」に據る）

西條八十

東京市の人、
明治二十五年
生、詩人

二四 蝶々

西條八十

旅商人の 蝙蝠傘に
蝶々が一つ さまつた

海岸町の 晝日なが
黄いろい翅を すりあはせ
蝶々はごろり ひさねいり

旅商人は 船に乗る
船はごこゆき 印度ゆき

赤い煙突

ぼうご鳴りや

右も左も青い海

椰子の葉蔭に

月が出て

知らぬ他國で

眼を覺す

蝶々のこゝろは寂しかろ

（蠟人形）

二五 熱帯の海

島崎藤村

島崎藤村
名は春樹、長
野縣の人、明
治五年生、文
學者

船は印度の南端を過ぎた。時とすると驟雨が印度洋へ
來た。それが我々の甲板へ吹込んだ。合奏のやうな海の
音も聞えた。雨後は殊に蒸暑い。熱を帯びた白雲が行手

マルセーユ
佛國の地中海
岸の港
郵船會社
正しくは日本
郵船株式會社
エルネスト・
シモン
佛國郵船の
名、作者はこ
の時の船に
乗つてゐた

の空に起つて、其處にあるものは永遠の眞夏かと疑はせた。
ふと波の間に一艘の汽船が見えた。我々の甲板から其
の汽船を認めた者は、何れも欄の處に立つて眺めた。「あゝ、
日本の船ではないか。」と、私は自分で自分に言つて見た。其
の二本の檣、其の一本の煙筒、我々の乗船に比べると、自ら構
造を異にした其の黒い船の形、皆見覚えがあつた。
私は艙の方の太い綱の積んである甲板の上に走つて行
つた。其處から船を望まうとした。神戸出發以來、我々の
船と前後して、マルセーユへ向ふ郵船會社の汽船があつた
から、波間に見えるのも其の船らしく思はれた。貨物を積
むことの割合に少くて速力の多く出るエルネスト・シモン

は見る間に其の船に追付いた。遠く離れて来た自分の國を一つの船にして見せてくれるやうな其の形が、宛も繪巻物のやうにして私の眼前にあつた。私は青く光る波を隔てて、向ふの甲板に集る人々の影までも望むことが出来た。果してそれが同胞であるか否かを見定めることは出来なかつたけれども、私は頻りに自分の帽子を振つて見た。

間もなく、エルネスト・シモンは其の船を遠く後に残して進んで行つた。海は又沙漠のやうな空虚に還つた。鳥一羽、船一艘、何一つ眼に入る物もなかつた。我々の船がシンガポールを離れた頃は、まだそれほどにも思はなかつたが、いよゝ印度の南端も過ぎ、コロンボもはや後になつた時、

コロンボ
セイロン島の
首都

何となく私も心寂しさを感じて来た。

船はアラビヤの海へ入つて行つた。其處には油を流したやうな海があつた。どろりとした青い波は幾趣幾様かの渦と皺と紋とを描いて見せた。白い雲の影が海に映るほどの晴れた日で、其の静けさは熱帯らしい静けさであつた。どうかすると、海は蛇のやうな肌の滑かさも見せた。私は又波間に群飛ぶ銀色の飛魚をも見て行つた、夕日に燃える火の海をも見て行つた。

夕風の楽しさに、甲板では皆思ひ／＼に涼み話を持寄つてゐた。私はもう自分の皮膚の色の異なつて居ることなどをさほど感じないで、皆の涼み話に耳を傾けてゐた。「失

禮ですが、私はMといふ者です。コロンボから此の船に乗つて参つたものです。」と、其の時私の側へ來て名刺をくれた日本の絹商があつた。こんな外國人ばかりの中で、珍しい同胞に遭つて、國言葉で話が出来ようとは全く私も思ひがけないことであつた。(海へ)

水野廣徳
海軍大佐

二六 薯拾ひ

水野廣徳

航海中は、艦の動搖による轉動を防ぐ爲に、大砲・端舟を始め、艦内一切の移動物を甲板若しくは舷側等に繫止し、殊に荒天の場合には一層嚴重に固縛する。それは、陸上の人間が外出の際に戸締をするのと同じ程度に、航海準備の重大

な一作業である。上甲板といはず、下甲板といはず、到る處に頑丈な綱が二重三重に張廻される。而も長い航海や又は動搖の烈しい時には、如何に固く縛つても次第に弛みを生ずる。今しも上甲板賄室の屋根に格納してある野菜箱の縛り索が緩んで、蓋が少しく開いた。締直し方を令する暇もなく、船が大きく一揺れすると共に、數十の馬鈴薯が甲板に轉げ落ちた。二揺れ三揺れする間に、二三百箇の薯がころ／＼と甲板を轉げ廻り、ぐ／＼すれば潮に流されて、吐水口から艦外に流出してしまふ。

冷蔵庫の設備のない舊式艦では、航海が五日も續けば、生糧食物として残るものは、只薯と玉葱ばかりである。青い

菜つ葉などは薬にしたくても見ることが出来ない。三度の食事は悉く罐詰と干物ばかりである。海軍小尉候補生として遠洋航海中、罐詰牛肉と馬鈴薯、同じく罐詰鮭と玉葱とに苦しめられて以來、今日に至つても此の四つのものは嫌ひな物の随一とされて居る。罐詰牛肉の煮たのをソーブと呼び、罐詰鮭の煮たのをヘドと呼び、當時候補生一同の最も辟易した食物であつた。航海中、日本へ歸つたら何を一番最初に食ふかとの問題に對し、十中七八人までは、鰻飯でなく、鯛の刺身でなく、菜つ葉の漬物で茶漬といふことであつた。罐詰とはいへ、毎日牛肉を食ひながら、あゝ、菜つ葉が食ひたい。」といへば、そんな贅澤なことを言ふな。」と叱られ

る。物の價值は、質の良否よりも、生産の多少に比例するといふ經濟學の原理が實地に證明される。

生糧食物が缺乏すると壞血病とかに罹り、手足が腐れ落ちるといふことである。昔の純帆前船時代に於て、海員の最も苦しみ最も恐れたのは此の壞血病であつた。世界一周に三年を費し、歐洲から日本への往返に二年を要した時代に在つては、半歳以上も海上に浮んで、一度も錨を港に投ぜぬことは珍しくなかつた。従つて、生糧食物の缺乏のため、乗員の過半は此の病氣に犯され、甚しきは總員全滅して、無人の空船が洋上に漂流したことさへあると云ふことである。旅順の戦役に於ても、ステッセル將軍の最も苦しん

ステッセル
露國の陸軍武
官、當時の旅
順の守將

乃木軍
陸軍大將乃木
希典の率ゐる
第三軍

だものは、乃木軍の突撃よりも、寧ろ壞血病の猛襲であつたと云ふことである。だから、遠航の艦船に於て、水とともに最も必要なものは生糧食物である。今後なほ四十餘日の航海を續ける本艦に取つては、好きと嫌ひとに拘らず、馬鈴薯は命の親である。一箇と雖も無駄にすべきでない。主厨が二三人で拾つて居るが、間に合はない。「當直候補生、薯が逃げるよ。」と、當直將校から注意される。出鱈目に「當直薯拾ひ方。」といふ珍號令を下すと、當直舷の水兵が四五十人ばかり甲板に飛出して、薯拾ひを始める。動搖のため歩行さへ困難な甲板に、大の男が四つ匍ひに這ひながら、前後左右に轉がり廻る薯を追つかける様は眞に珍無類。候補生ま

でが彌次りに飛出す。活動寫眞の好材料だ。滅多に笑はぬ航海長までが腹を抱へて居る。これも荒天の生む一喜劇である。(海に據る)

二七 山の湯

久米正雄

私が北海道の山中に在る兄の家に滞在してゐた時の話である。私は發電所から兄の歸るのを待つて、一緒に温泉へ入りに出掛けた。温泉は、兄達の住んで居る社宅から五町ほど離れた出鼻を廻ると、すぐ眼の前に見えてゐた。温泉とは云ふものの、半ば農業を營んで居る煤けた小さな湯宿がたつた一軒立つて居るだけであつた。それでも湧出

久米正雄
長野縣の人、
明治二十四年
生、文學者

して居る湯は美しく透徹つてゐた。それは、板葺の小屋の中の、石で疊んだ薄暗い湯壺に、きら／＼と光つて漑へられてあつた。

此の湯は、他に何もない發電所の人達に、山中生活の唯一の慰めを與へるものであつた。彼等は業務を終ると、何よりも先に此處へ來て、温く湧いて流れて居る湯の中へ伸び伸びと身を横たへるのを常としてゐた。けれども、今日はどうしてだか、誰も來て居る者はなかつた。

兄と私は棚の上に衣物を脱棄して、湯の中へ這入つた。湯は我々の爲に一時ゆらくと騒ぎ立つたが、頓て又靜まつた。私は首筋まですつかり浸して、見るともなく兄の方を

見た。屋根の明り取りから落ちる夕暮に近い僅かな光線で、逞しい兄の身體がぼんやりと白く湯壺の中に浮いて見えた。

二人が斯うして同じ湯の中に一緒に入るのは全く久しぶりで、滅多にないことであつた。それほど二人は離れてゐたのであつた。兄弟といつても、此の二人ほど違つた兄弟は他に餘りあるまいと思はれた。二人は言はば人生の兩極端を歩いて居るやうなものであつた。兄は生活の道として科學を選んだ。そして、六年前高等工業を出ると、すぐ此の北海道の山中に身を埋めて、運命の與へる儘に忍従と犠牲との生活を續けてゐた。彼には早くより養はなけ

ればならぬ母と、教育を興へなければならぬ弟とがあつた。其の弟が私である。私は行くべき道を文學に選んだ。そして、今年帝國大學を出るには出たが、今尙何の爲す所もなく、東京の街頭に慌しい生活をして居る。

兄は私の卒業によつてほつと一息ついた様子であつた。そして、始めて妻を娶り、國許に一人置いた母を此處へ呼寄せることになつた。それを機會にして、私も遙々東京から會ひに來たのである。卒業後の方針、一家の將來、二人は直に相談しなくてはならぬことを多く持つて居るのであつた。兄は今となつて容易に山を出ることは出來なかつた。そして、弟の私が東京を離れて生活を他處に求めるこ

とは、全く魚の水を離れるにも等しかつた。偶に斯うして山中に來て、安らかな周圍に取巻かれてゐても、絶えず東京に残して來た仕事を氣遣はずには居られない私なのである。

湯は此の生活と境遇と性質とを異にした二人の兄弟を浸して、靜に湛へてゐた。耳を澄すと、湧口から溢れ出る音が微に聞える。「靜かだなあ。」と私は言つた。「偶に東京からこんな處へ來ると、一風變つて面白いだらう。」と兄は言つた。「併し、私はもう四年此の湯に入り續けたからなあ。」よくこんな山の中に辛抱してゐたもんだな。」私は思はず感歎の意を洩さずには居られなかつた。「それはお前達とは心掛

が違ふからさ。」と、兄は微笑を浮べながら、答へるやうに言續けた。「お前達から見れば、私のやうな生活はまるで下らないものと見えるかも知れない。併し、私のこんな地味な生活も人生なら、お前達の派手な生活も人生なんだ。いや、生活の價値に高下がないばかりぢやない、お前と私との人間としての價値にも高下がある譯のものではないんだ。それあ、私は斯うして社會の下積みになつて居るから、物を書いて居るお前などと較べては、まるで有名さの程度は違ふだらう。併し、少し有名だからつて、お前の方が私より偉いと云ふ筈はあるまい。偉いどころか、事實にぶつかつて見たら、やつぱり私の方が人間としてずつと出來上つて居る

だらうと思ふ。どうだ、お前もさうは思はないのか。」「どうだかな。」私は微笑と疑問とを以て、此の愛すべき兄の所論に酬いた。「どうだかぢやない。全くさうならぬやうに用心せよ。」兄はかう快活に言放つて、がばと湯の中から洗ひ場へ上つた。

私はその様子を目で追ひながら、猶も湯の中に浸つてゐた。そして、矢張漠然と兄と自分との身の上を比較してゐた。「さうだ、人間としてどちらが眞の生活をして居るのだか解つたものではない。」私はかう呟いて、物に浮されたやうな東京での自分の生活や、選ばれたもののやうに思ひ上つた自分の態度を顧みた。そして、自分自身を振返る爲に、

一種の對照として與へられた此の兄の身體を三度見守らなければならなかつた。

兄は無心に左の腕の邊を手拭で擦つてゐた。もう湯小屋の中は闇が隅々を満たして來た。兄の顔は見えなかつた。只暢然とした其の舉作だけがぼんやり浮いて動いてゐた。併し、それだけでも如何に兄が安らかな顔をして居るかを思はせるに十分であつた。私はひよつとすると兄が微笑を湛へて居るのではないかとさへ思つた。それも人生を達觀し盡したと云ふやうな高慢臭い冷たい微笑ではなく、自分に課せられた自分だけの仕事を忠實に果して居る満足から來る溫い人のいゝ微笑である。

聽て宿の子が小さなカンテラを提げて來た。「やあ、信坊か。そいつは有難う。」兄はかう言ひながら其の貧しい燈火を受取つて、柱の中途へ懸けた。赤いぢ、と鳴るやうな光が、兄弟の血色を増した身體を照して、湯壺の中に碎け散つた。「ほんとにいゝ湯だ。」私はかう言つて、満足さうに湯から上つた。「併し、夏になると、此の梁の上から三尺位な蛇がよく落ちて來るぜ。」何と思つたか、兄は不意にこんなことを言出した。「それは猶面白いぢやないか。」私はかう言つて、其の眞夏の晝の蒼み渡つた閑寂な湯壺と、其の上に落ちてはさら／＼と泳ぐ銀色の蛇を晝のやうに想像したりした。私には全くこの小さな湯が氣に入つて了つた。

私は此處に滞在して居る中に、毎日入りに來ることに決めた。一人で來ることもあつた。母・兄・嫂、この三人の家族と一緒に來ることもあつた。湯の中で、私は色々な人と同浴した。發電所に勤めて居る電工の誰彼とも知合になつた。そこらの山の湯から山の湯を渡り歩く片手の利かない老人にも會つた。開墾地々々々を行商して歩く氣輕な小間物商とも話をした。僻地の官署などを廻つて歩く靴直しの爺さんとも言葉を交した。誰も彼も自分の心に平和な影響を與へない者はなかつた。自分は此處に來てから、全く塵寰を去つたやうな氣がしてゐた。私はそれを感謝してゐた。(手品師)

二八 平民宰相立志物語

我が國最初の平民宰相さいしやう原敬さんが志を立てて故郷を出たのは明治五年で、十六歳の時だつた。それまで作人館の修文所に學んでゐた原さんは、世間に有りふれた秀才物語と同じく、學友の間に神童と呼ばれるほど頭が良くて、當時僅に原さんと轡を並べ得たのは、後に文學博士となつた、今は故人の那珂通世さんだけだつた。併し、これほどの俊秀しゆんしゆも、修文所が間もなく閉鎖されたので、學ぶべき學校がなく、當時流行の東都遊學を志すに至つたのである。原さんは五百石取の若様ではあつたけれども、次男坊ではあり、且殿様が二十萬石の南部領から奥州白石おしやくの十三萬石へ轉封てんぽうを命ぜられたため、一藩擧げて周章狼狽しゆしやうらうたい上は家老から下は小身者に至るまで、お家重代の寶物を賣捌うりさばいて、危く其の打續く貧乏に堪へる状態じたいで、無論原さんの家も其の例には洩れなかつたのだ。そこで、

原敬 盛岡市の人、政友會總裁、内閣總理大臣、大正十年歿、年六十六

作人館 南部藩の子弟を教育する學校

那珂通世 盛岡市の人、漢學者、東京高等師範學校教授、明治四十五年歿、年五十八

周章 かわてること

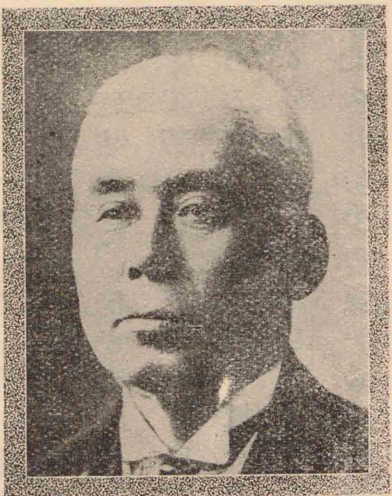
狼狽 いらたへること

南部富士
岩手山、盛岡
市の西方、海
抜六八三〇尺
幻影
まぼろしの
かげ

折角原さんが東都遊學の志を立てたとして、固より學資のあらう筈はなく、殊に此の頃から負嫌ひて剛情我慢であつた原さんは、俺のことは俺で處分するんだ貧乏な瘦世帯の世話になることはない。』とばかりに、僅かの路銀を懷中にして、當時同藩の生徒だつたMとHとの三人連れて、燃盛る青雲の志を抱いて、勇しく故山を出たのであつた。——季節は丁度南部富士の雪が解けて、街を貫く北上川の堤に蝶の飛交ふ頃——柔かな春の日射しをぼか／＼と浴びて、奥州街道を西へ上る此の三人の若人達は、出世の幻影に心がときめくので、路銀の乏しい旅路もさほど苦痛には感じなかつた。併し、困つたことには、まだ路程の半ばにも達しない仙臺で、原さんは路銀が盡きて了つた。他の二人とて、固より原さんに惠むほど豊かな路銀の所有者ではなかつたので、金のない原さんに掛り合つてゐては、あこがれの都へ落着く日が遅くなるとでも思つた。

言葉を構へ
る
口實を作る
郷黨
郷里の人々
さ、やか
小さい
拱く
組む

ものか、言葉を構へて一足先へ行つてしまつた。——行かうか、路銀がない。歸らうか、郷黨に合はせる顔がない。それでも、燃えしきる青雲の志を何としよう。——木賃宿にも等しい仙臺のさ、やかな旅籠屋の間で、薄暗い行燈の影に、思案の腕を拱いた原さん、それは、後年多くの政敵を向ふに廻して、天下の權を握る術を考へた以上、思案であつた。所が、原さんは決して神様から見捨てられてはゐなかつた。……といふのは、隣室に泊つてゐた一人の旅商人が、思案投首の此の少年を哀れに思つて、俺は東京深川のこれ／＼と云ふ者だ。それほど東京へ出たいならば、俺が連れて行つてやらう。』と、親切な救ひの言葉を掛け



てくれたことであつた。

斯くて原さんは此の旅商人の荷物などを持つて、陸前の萩の濱から海路遙に品川へ着いた。此の商人は船の中でもなにくれと原さんを舫つて、君は何が得意だ。あてなしに東京へ出たとて苦しむばかりだ。得意なものがあるなら、それで飯を喰べることにするが好い。なども言つた。原さんは、此の時、幼少の頃から工藤經方といふお師匠さんに就いて學んだ洋算のことを思ひ出し、數學ならいくら出来る。」と答へたものであつた。そこで、深川へ着くと、此の男の世話で、原さんは月俸金四圓也て、某



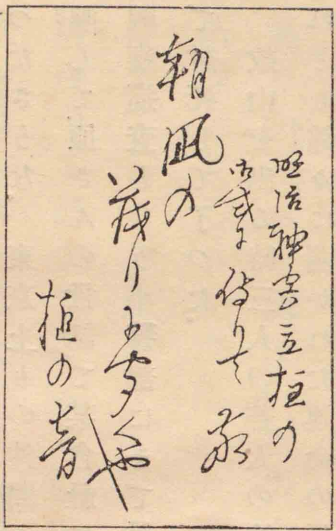
原敬の生れた家

サラリーマン
俸給で生活する人、月給取郵便報知今の報知新聞

明治神宮
立柱の御式に侍りて
朝風の茂りに聞くや植の音

開拓
ひらく

小學校の數學の先生となつたのであつた。世間では、サラリーマンとしての原さんの振出しを、郵便報知時代の記者生活だと思つて居るけれども、是より先、原さんは既に教師として俸給生活の味を知つてゐたのであつた。而も米一升が二錢で買へるといふ



原敬筆蹟

當時、僅か十六歳の東北の田舎者が、東京の盛り場で四圓の月給を取るとは、餘程の成功と謂つても好いのであつた。後年此の話が出た時、原さんは自分の運命を開拓してくれた此の

恩人の名を忘れたことを頗る残念がつたといふ。話は飛んで三年前、盛岡市古川端の自邸に舊友を招いて打寛いだ原さんは、時恰も居合はせた東京上りの仲間の一、人Mを捉へて、

無髻
ひげなし
落魄
おちぶれる

田原坂
熊本縣

懸隔
へだたり

相馬御風
名は昌治、新
潟縣の人、明
治十六年生、
文學者

「君は苦しくなつて故郷へ歸つたから駄目だつた。僕などは如何に苦しくても斷じて歸らないと心に誓つたものだよ。」と語つて、成功兒としての誇の色に榮えたあの無髻の顔を打崩して、朗かに笑つたさうな。東京上りの仲間と云へば、Mは苦勞の甲斐もなく落魄して、原さんの世話で某會社に勤め、Hは入京後刻苦勉勵して警視廳巡查となり、小警部にまで昇進したが、西南戦争の時に田原坂で討死して了つた。

故山を出る時、三人の若人の抱いた青雲の志は相同じかつたけれども、銘々に開かれた運命の扉は、餘りに其の懸隔が大き過ぎたのであつた。（東京日々新聞に據る）

二九 北國の初春

相馬御風

六七尺も積つてゐた雪が、何時の間にかすつかり消えて了つた。解けた雪は、解けるあとから、殆ど全く人間に氣付かれずに、或は蒸發し、或は大地に吸込まれ、或は流れ去つて、どうして無くなつたか解らぬやうに無くなつて了つた。幾月かの永い間、深い雪の中に閉込められてゐた北國の子供等が、久しぶりで黒い大地の面を見出した時に歡ぶ有様は、全く言つて見やうのないものである。まだ可なり深く消殘つて居る雪の處々に、黒く濕つた土が覗き初めると、子供等は言合はせたやうに次々に其處に集つて行く。そして、殆ど躍り出さんばかりの嬉しさで土を踏廻る。田や畑の處々に見え出した黒土の斑點には、鷗や鴉や雀が先づ

群を成して集つて来る。彼等の上にも生々とした歡が輝いて見える。

むらぎもの心たのしも春の日に

鳥のむらがり遊ぶを見れば

良寛
越後國長岡の僧、天保年中歿、年六十餘

一茶
小林氏、信濃國の人、徳川末期の俳人、文政十年(一八二九)歿、年六十



斯う良寛が歌つた心持も、特に雪國に住む者に一層深い味があるのである。

「長々の月日、雪の下に忍びたる落蒲公英のたぐひ、やをら春吹く風に時を得て、雪間々々を嬉しげに首さしのべて。」
一茶が書いたやうな若草の歡も、

雪國に住む者にして始めてしみぐ、と味はれるのである。

大地を踏歩く人の足音の久しく聞えなかつたのを、靜かな夜にふつと聞付けた時の一種微妙な懐かしみと歡ばしさ、そんな心の經驗も雪國に住めばこそである。

あづさ弓春になりなば草の庵を

疾く訪ひてまし逢ひたきものを

斯ういふ良寛の歌も、北國の冬といふことを考へないではなかく理解されない。全く北國の住民の春を待つ心には、測り知れない深さが窺はれるのである。(樹かけ)

三〇 春待つ心

北風のすさぶがまゝに

野も山もうらさびたれど

草木や、芽は膨らみて

暖き光を待てり

ひねもすに口をつぐみて

鶯は谷にこもれど

笹かげに空をうかゝひ

巢を出づる構へやすらん

沖邊ゆく白帆も稀に

浪の花岸に凍れど

立ちならぶ粗朶に青みて

海苔の香の高さが着けり

やがて見よ月はおぼろに

島影は夢かご浮び

春の海静けきゆふべ

櫻鯛をごらん近し

かくて今春は隣れり

雪分けて若菜も摘まん

遠近の梅も尋ねん

樂しきは春待つ心地 (國定讀本)

三一 お遍路さん

荻原井泉水

りんくといふ冴えた音が、遙かの山裾から此の山莊にまで聞える。それはお遍路さんが振る鈴の音なのだ。「お遍路さん」とは何といふ親み深い言葉だらう。——四國八十八箇所に残された弘法大師の靈場を遍歴して歩くのがお遍路さんである。併し、如何に信仰の爲とはいへ、四國を一巡することは、日數からも勞力からも、殊にお遍路さんに多い女の身として大抵のことではないので、四國の代りに

荻原井泉水
名は藤吉、東京市の人、明治十七年生、俳人
山莊
作者は或年讃岐の小豆島の知人の別荘にゐた
弘法大師
僧空海、讃岐國の人、高野山金剛峰寺の開祖、承和二年(西暦)歿、年六十二

此の小豆島にある八十八箇所の靈場を一巡すれば、同じ功德を積み得ることとされて居る。「島四國」といふ言葉も出て居る。島四國の遍路にしても、女の脚では六七日かゝるといふことである。多くは岡山から若しくは高松から來るお遍路さんは、船で土庄港に着く。其處から發足して、第何番といふ札所の順に參拜の路を辿るのである。菅笠を被り、裾をからげて、背には手廻りの物を太い紐で負ひ、胸には自分の名を書いた札を入れた札箱を吊して、塔婆形に刻んだ金剛杖を持つて、淋しいのは一人二人、多いのは何十人と團體をなして、銀のやうな海の光を浴びながら、海に近い麥畑の中の道を辿つて行く。それは繪である、美しいこ

とである。此の山莊にまで聞えるりんくといふ冴えた鈴の音は、彼等の先達が振つて居るものと見える。

お遍路さんは時を限らないが、風も日も長閑かに、路を歩くのに好い氣持であり、又農事も比較的ひまな四月頃に一番多く見受けるといふことだ。此の頃島に着く船は、日に何百人といふお遍路さんを渡して来る。一體遍路といふものは何時頃から始つたものかは知らないが、大師の教門を弘くする上からいつても、各自の信心を厚くする上からいつても、誠に好いことだと思ふ。そればかりでない。お遍路さんは到る處で愛せられる、又恵まれる。お遍路さん同志も亦お互に遍路であるといふことの爲に信賴する、又

扶助する。此が實に好いことだと思ふ。未知の人達が道連になつて親しんで行く、路を教へ合ひ、足らぬ物を足し合つて行く。お遍路さんが路傍の家に荷物などを置けば、どの家でも喜んで預つて呉れる、決して紛失しないといふことだ。此は遍路としての誰もが一つの眞實の道に繋がつて居るといふ意識から來るのだ。此の道に參するには、知識も修養も資格も、そんなものは何もいらぬ。婆さんでも、娘でも、男でも、子供でも、唯一つの道を信ずることによつて、此の尊い心持に一致することが出来るのだ。南無大師遍照金剛と讚仰する聲が出て來るのだ。此は實に美しいことだ。争鬭と欺瞞との満ちた社會の中にあつて、信賴と扶

助とに心を合はせて行くぐらゐ美しいことが他にあるであらうか。此の島の春を賑はすお遍路さんは、繪としてだけ美しいのではない、彼等が愛し合ひ信じ合ふことに生きるが故に美しいのである。

そして、此のことは獨り彼等お遍路さんの上のことだけではなない。私達は皆人生の遍路である。銘々に自ら負はねばならない物を負うて、自分の名前を書いた札を撒散しながら、自分々々の道を遍歴して居るのである。而も私達の周圍には、此のお遍路さんに見るやうな信賴と扶助とが行はれて居るだらうか。——私は思ふ、私達は此のお遍路さんに學ばねばならない、遍路といふ行事を残した弘法大師

の暗示を感じなければならぬ。そして、たとひ人間の悉くがお遍路さんの心を心とするまでに到らなくとも、私達は先づお遍路さんの信と愛とを以て人生を歩きたいものである。(山水巡禮)

三二 寓話三題

一 小石と金剛石

松村武雄

或人のなくした金剛石が暫く道に轉がつてゐたが、到頭一人の商人に拾はれた。商人はそれを王様に賣つた。王様はそれを王冠の飾の一つにした。之を聞いて小石が大騒ぎを始めた。小石は金剛石の運の好いのが羨しくて耐

松村武雄
文學博士、浦
和高等學校教
授

らなかつたのである。で、或日、小石は傍を通つた百姓を呼
止めて、どうか都に連れて行つて下さい。噂に聞くと、金剛
石の奴は都で出世して居るさうですが、彼奴ももとは私の
傍に永年轉がつてゐたんです。彼奴も私も同じ石ですよ。
私だつて都に出れば出世するにきまつてゐます。」と言つた。
百姓は小石を荷車に入れて都に持つて行つた。望み通り
に都に出ることは出たが、王冠の飾にはならないで、道路の
穴を埋めるのに使はれた。

松平樂翁
名は定信、磐
城國白河城
主、徳川末期
の老中、文政
十二年（西九
段、年七十二

鷹の羽にすむ蟲ありけり。空高く飛翔ける時は、遙に人
の住家などをも見下しつ。げに我は事足れる身かな。翼

も動かさで千里の遠きに行通ひ、雲居の外までも上るめり。
特にさまざまの鳥は皆恐れて遁走る。げにも我に勝るも
のは大方あらじ。など思ひつゝ、かの鷹の羽の中にあるつゝ、頻
りに肉を刺し血を吸ひてありしが、其のやから多くなりも
て行きしにや、遂に其の鷹も斃れにけり。それより自ら出
でて飛翔けらんと思へども飛び得ず、走らんと思へども速
かならず。血も盡き肉も涸れぬれば、今は命つなぐやうも
なく、辛うじて先づ其の毛の中を潛り出でて這行けば、雀の
子のゐたりけり。我を恐れなんと見れば、雀の子は知らぬ
さまなり。如何にして見付けざるかと傍へ這寄れば、嬉し
げに見て、嘴差出して啄まんとす。例なきことなれば、恐し

那珂通高
盛岡の人、漢
學者、那珂通
世の養父、明
治十二年歿、
年五十二

くて遁隠れぬと、彼の友どちに語りにつけり。(花月草紙)
三 稻の穂
那珂通高

一農夫あり。兒を携へ出でて、稻の熟せるや否やを檢す。
兒問ひて曰く、此の稻の穂を見るに、或は昂く或は俯す。何
れか貴きと。父二つながら其の穂を抽きて、之に諭して曰
く、内充實すれば必ず下る。かの昂然として屈すること
知らざるものの如きは、皆其の未熟なるによりてなり」と。

現代國語讀本 卷二終

常用漢字及略字 (臨時國語調査會決定)

(一) 常用漢字 (千九百六十二字)

【一】一丁七丈三上下不
世丙並【一】中【一】丸圭
【ノ】久乏乘【乙】乙九乞
也乳亂【丁】了事【二】二
云互五井【一】亡交京亭
【人】人仁仇今介仕他付
仙代合以仰仲伴任企伊
伏伐休伯伴伺似但位低
住佐何余佛作使來例侍
供依侮候侵便係促俊俗
保俠信修俳俵倅併倉個
倍倒候借倫假偉偏停健
側偶傍傑備催働傳債儂
傾僅像僚僞僧價儀儉儉
儒價優【儿】元元充兆兕
先光免免兒免【入】入内
全兩【八】八公六共兵具

典兼【口】冊再【一】冠
【シ】多冷凉准凌凍凝
【凡】凡【口】凶凸凹出
【刀】刀刃分切刈刑刑列
初判別利到制刷券刺刻
則削前剛副割割劇劊劊劊
【力】力功加劣助努効勸
勇勉勸勤務勝勞募勢勸
勳勵勸【夕】夕夕包【ヒ】
化北【口】匹區【十】十千
升午半卑卓卓協南博
【卜】占【口】印危却卵卷
即聊【一】厄厘厚原【ム】
去參【又】反友反反叔取受
叛【口】口古句叫召可叱
史右司各合吉同名后吏
吐向君吞吟否含呈吸吹

告周味呼命和咽哀品員
哲唐唱商問啓善喉喜喪
單嗣嘉嘗器噴嚴囑【口】
囚四回因困固國園園圓
圖團【土】土在地坂均坊
坐坑坪垂型垣埋城域執
培基堀堂堅堤堤堪報場塔
塗塚塵境墓屏增墨墮壁
壇壓壤【土】土壯壹壽
【又】夏【夕】夕夕多夜夢
【大】大太太夫央央失奇奉
奏契奔奢與奪獎奮【女】
女奴好如妃妊妙妨妹妻
妾婦始姑姓委姦姪姬姻
妾威娘娛娠婚婦婿媒嫁
嫉嫡嫌孃【子】子字存孝
季孤孫學【一】宅宇守安

完宗官定宛宜客宜室宮
宰害宴家容宿寄密富寒
察寡寢實審寫寬寶【寸】
寸寺封射將專尉尊尋對
導【小】小少尙【尤】就
【尸】尺尼尾尿局居屈屈
屋展層履屬【山】山岡岩
岬岳岸岬峯島峽崇崎崩
嶮【川】州巡巢【工】工
左巧巨差【口】己【巾】巾
布帆希帖帝帥師席帳帶
常幅幅幕幣【干】干平年
幸幹【么】幻幼幾【一】床
序底店府度座庫庭庭庶康
廉廊廟廢廣廳【又】延廷
建廻【升】弄弊【弋】弋
【弓】弓弔引弘弟弱張強

彈【彡】形影【彡】役
彼往待律後徐徑徒得
從御復循微德微【心】
心必忍志忘忙忠快念
忽怒思急怨怪怪恐
恥恨恩恭息悅悔悟悲
悼情感惜惠惡情惱想愁
愉意愚愛感慈慈憐憐憐
憤慨慮慰慶慈憂憐憐憐
憶憾憤懇懲懷懸戀
【戈】成我戒威戰戲戴
【戶】戶房所【手】手才
打托扱扶批承技抑投抗
折抱抵押抽拂拍拒拓拔
拘拙招拜括拏拾持指振
捌搨捧拾掃授掌排搨掛
探探控推接提提換握揭
揮援損搖搜摘携摩撫擇
擊操攢據擬擴攝【支】支
【支】收改攻放政效效效

教敏救敗敢散敬敵數數
整【文】文【斗】斗料料
【斤】斤斤斬新斷【方】方
施旋旋族旗【无】既【日】
日且旨早旬旭昇昌明易
昔星春昨是時晚畫普景
晴晶智暇暖暗暑暑暑暑
曇曜【日】曲更書曹曹替
最會【月】月有朋服朕朗
望朝期【木】木未末本札
朱机朽杉李材材杖束柿
杯東松板枕林枚果枝枯
架柄某染柔查柘柱柳栗
桠株根格栽桃案桐桑桶
梅條梨梯棧棧棋榭柳棟
森棺植楠業極榮檣概樂
槿樓標樞樞樣樹橋橋橫
檄檄檢櫻欄欄【欠】欠欲
款款歌歌歌歌【止】止正
此步武歲歷歸【夕】死歿

殊殉殖殘【支】段殺殺殺
毀【母】母每毒【比】比
【毛】毛毫【氏】氏民【气】
氣【水】水水永汁求汗污
江池決汽沈沒沖沙河沸
油沼沼沼況况泊法波泣
泥注泰泳洋洗津洪洲活
派流浦浪浮浴海浸消涉
液淑淚淡淨淫深混清淺
添減渡溫測港渴游湖湧
湯源準溝溢溶溶滅滋滑
滯滴滿漁漂漆漏演漕漢
漢漫漸潔潛潮澤激濁濃
濕濟濫濇瀧瀧灌灌【火】火
灰炎炊炎炭烈鳥無焰然
煉煎煮煙煤照煩熊熱熱
燃燈燒營燭燭燭【爪】爪
爭爲爵【父】父【父】父版
牌牌【牙】牙【牛】牛牧物
牲特犧【犬】犬犯狀狂狐

狩狹狠猛猶猶猿猴獨獲
獵獸獸【文】文【玄】玄率【玉】玉
王玩珍珠班現球理翠
【瓜】瓜【瓦】瓦瓶【甘】甘
甚【生】生產甥【用】用
【田】田由甲申男町界畏
烟畔畜畝略番畫異雷當
疊【疋】疋疎疏疑【疋】疋
疲疾病症痕痘痛痢瘵
【火】登發【白】白百的皆
皇【皮】皮【血】血盆盆盛
盜盟盡盤盤【目】目盲直
相省眉看真眠眺眼着睡
督睦瞭【矢】矢知短【石】
石砂砲破研硬硯碇碇碑
確磁磨礮【示】示社祈祕
祖祝神稟祭祭禍禍禍禍
【禾】禾私秋科秒租稗秩
移稅程程種種稱稱稼稼穀
積穗穗【穴】穴究空穿突

窈窕窗窮【立】立章童端
競【竹】竹竿笑笛笠符第
筆等筋筒答策策筒算管篇
箱節範築篤筒簿籍【米】
米粉粒粘粗粟粹精糖糞
【糸】系紀約紅紋納純紗
紙級紛素紡索紫累細紳
紹紺終組結絕絞絡給統
絲絹經綠維網網綴統綿
緊緒線緋綠編綬緯練縛
縣縫縮縱總績繁織繕繪
繭繅繼纂續【五】缺【网】
罪置署罰罵罷羅【羊】羊
美羣義【羽】羽翁習習翼
【老】老考者【而】耐【耒】
耕【耳】耳耽聖聘聞聯聲
職聽【肉】肉肉背肝股肥
肩背脊背肺胃背胎胞胴
胸能脂脇脈脊脚脫腎腐
腕腦腰腸腹腺膏膚膜膝

膳膳臆臆【臣】臣臥臨
【自】自臭【至】至致臺
【日】日與舅與舉舊【舌】
舌舍【舛】舛舞【舟】舟航般
舵船舶艇般般【良】良
【色】色【艸】艸芝花芽芳
苑苗若苦莢茂茶草荒荷
莊莖菊菌菓菜華秋萬落
葉著莖莖莖莖莖莖莖莖
薄薦薪藍藏藏藤藤藥藤
【虎】虎虐處虛虜號【虫】
蚊蛇蛙蜂蜜融蟲蠶蠶
【血】血衆【行】行術街衝
衝衝【衣】衣表袂袂袋袖
被袴裁裂裏袷補裝裸製
復復【西】西要覆【見】見
規視親覺覽觀【角】角解
觸【言】言訂計討訓託託
詠詠訪訪許許診診詐詐評評
詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠詠

認誓誕誘語誠誤誦說課
誼調談諒諒諒諒諒諒諒諒
謀諷謂諒諒諒諒諒諒諒諒
譜警譯議諒諒諒諒諒諒
【谷】谷【豆】豆豐【豕】豕
象豪豫【貝】貝貞負財賈
貧貨販賈賈賈賈賈賈賈賈
費賈賈賈賈賈賈賈賈賈賈
賞賈賈賈賈賈賈賈賈賈賈
【赤】赤赦【走】走赴起超
越趣【足】足距跡路踣踣
踣踣躡【身】身【車】車軌
軍軒軟軸較載輻輻輻輻輻
輪輸輿轉【辛】辛辨辭辯
【辰】辰農【走】走迂迎近
返迫迭迷迷迷迷迷迷迷
透透途途通通造造連連週週
逸逸逸逸運運過過道道達達
遞遞遠遠適適適適適適適
還還邊【邑】那那那那那那

郡部郵都鄉【酉】酌配酒
酢酬醕醕醕醕醕醕醕醕
【里】里重野量【金】金釜
釘釘鈞鈞鈞鈞鈞鈞鈞鈞鈞
銘銘銘銘銘銘銘銘銘銘
鎖鎖鏡鏡鑄鑄鑄鑄鑄鑄鑄
長【門】門閉開闔闔闔闔
闔闔【阜】阜防降限陞陞
陣陣除除除除除除除除
隅隅隆隆階階階階階階階
險險隱【佳】佳雀雀雅集履
雌雙離離離離離離離離
零雷雷雷雷雷雷雷雷雷
【青】青靜【非】非【面】面
【革】革靴鞍【音】音響
【頁】頁頂項順頤頤頤頤頤
頤頤頤頤頤頤頤頤頤頤頤
頤頤頤頤頤頤頤頤頤頤頤
顧顧顯【風】風【飛】飛
餅餅餽【首】首【香】香

【馬】馬馳駁駃駐騎騰騷
驅驕駿驚驛【骨】骨髓體
【高】高【影】髮【門】關

【鬼】鬼魂魔【魚】魚鮮鯉
鯛鯉【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄
【函】鹽【鹿】鹿麗【麥】麥

【麻】麻【黃】黃【黑】黑獸
點黨【鼓】鼓【鼠】鼠【鼻】
鼻【齊】齊齋【齒】齒齡

【龍】龍【龜】龜

注意

(一)本表にない漢字は假名で書くこと (二)固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、たゞし
外國(支那を除く)の人名地名は假名書とすること (三)代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞およ
び助詞はなるべく假名で書くこと (四)外來語は假名で書くこと

(二) 常用略字 (百五十四字、下の小字は字典體)

勸勸權權灌灌 歛歛 觀觀
沢澤 挾挾 譯譯 馱馱 積積
變變 恋戀 蠻蠻 灣灣 莖莖
徑徑 經經 輕輕 併併 摒摒
瓶瓶 餅餅 研研 齊齊 齋齋
濟濟 劑劑 殘殘 淺淺 賤賤
錢錢 勞勞 營營 榮榮 學學
覺覺 拳拳 譽譽 斷斷 繼繼
齒齒 齡齡 濕濕 頭頭 窓窓
總總 屬屬 囁囁 為為 偽偽

帶帶 滯滯 參參 慘慘 兩兩
滿滿 發發 廢廢 崩崩 獵獵
亂亂 辭辭 潛潛 贊贊 走走
徒徒 從從 縱縱 惱惱 腦腦
處處 挾挾 担担 胆胆 未未
麥麥 壽壽 鏽鏽 數數 樓樓
樂樂 藥藥 誦誦 統統 竜竜
滝滝 瀧瀧 隨隨 隨隨 鹿鹿 麗麗
聽聽 廳廳 虛虛 戲戲 遲遲
解解 獨獨 觸觸 疊疊 撰撰

虫蟲 蚕蚕 飯飯 兎兎 兎兎 刺刺
勵勵 嘗嘗 國國 團團 圓圓
因因 圖圖 壹壹 實實 寫寫 室室
扣扣 控控 敘敘 條條 樣樣 歸歸
氣氣 氣氣 爐爐 檣檣 獻獻 畫畫
苗苗 留留 盡盡 禮禮 稱稱 糸糸
欠欠 缺缺 聲聲 台台 舊舊 萬萬
号号 號號 証証 豐豐 弁弁 辨辨 通通 遞遞
邊邊 邊邊 醫醫 鐵鐵 関関 関関 雙雙
靈靈 靈靈 餘餘 館館 體體 體體 關關

塩鹽 点点 党黨 龜龜

大正十二年十一月廿七日印刷
大正十三年十一月三十日發行
大正十三年一月四日訂正再版發行

| | |
|--------|---------|
| 現代國語讀本 | 大正十五年版 |
| 卷一四 | 定價金四拾五錢 |
| 金七拾七錢 | |
| 卷五十一 | 定價金四拾錢 |
| 金六拾八錢 | |

著者 八波 則吉

發行者 株式會社 東京開成館

印刷所 東京市牛込區 櫻町七番地

發行所 日清印刷株式會社

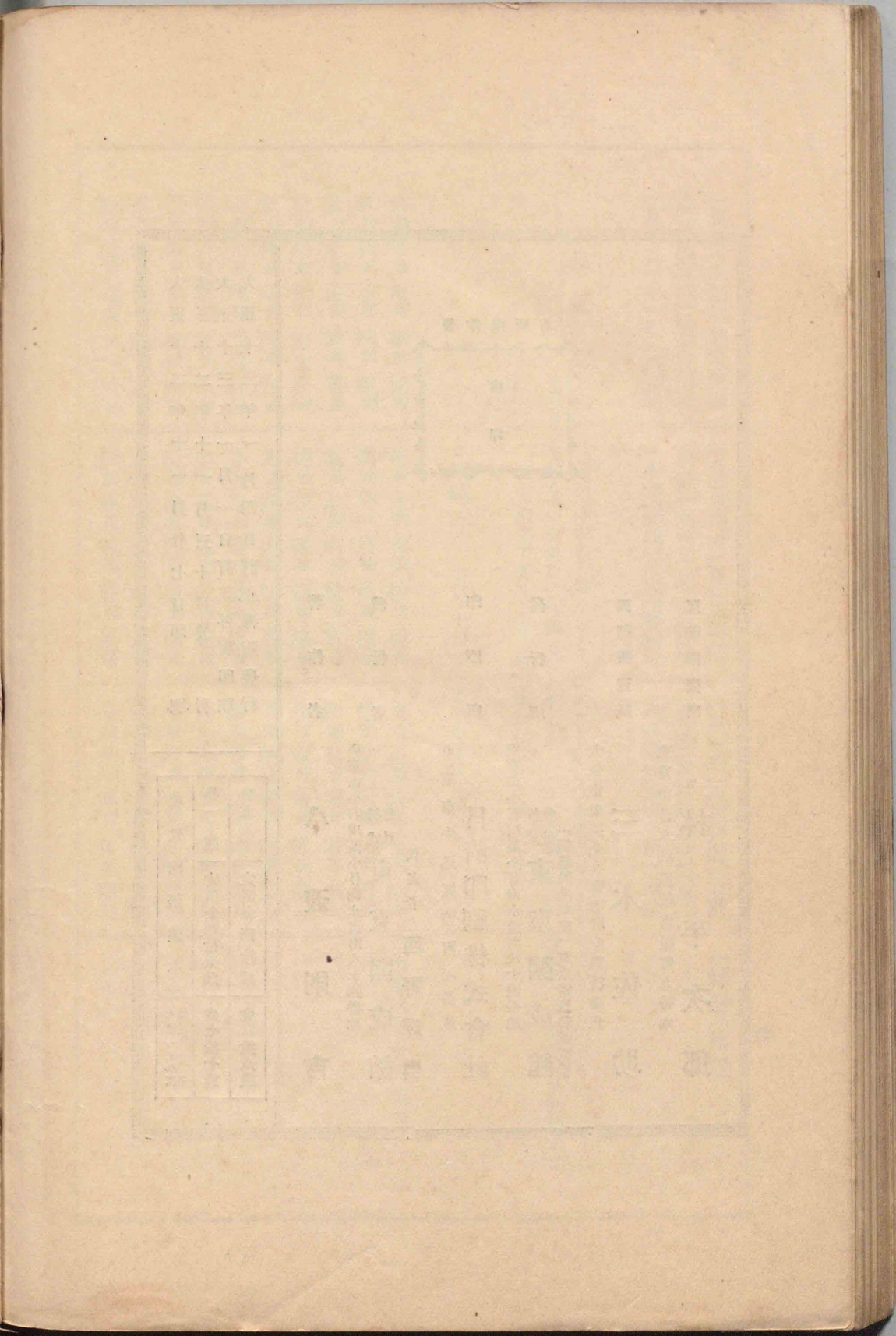
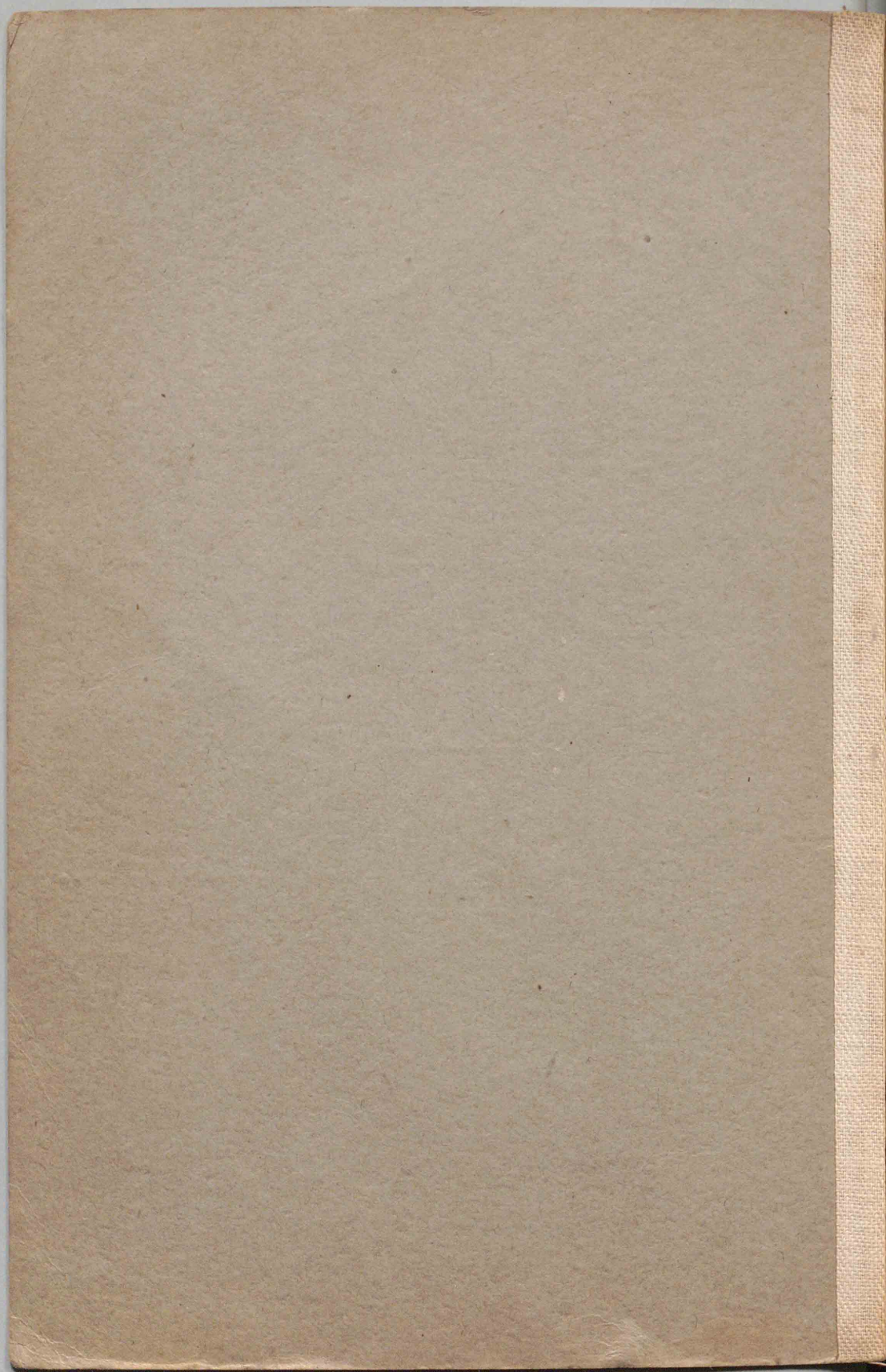
發行所 株式會社 東京開成館

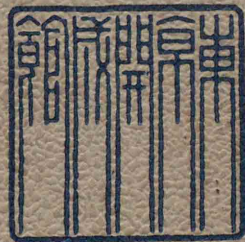
發行所 三木 佐助

發行所 林 平次郎

著作權所有







広島大学図書

2000080796



庫
4
96